

上田萬年共撰
樋口慶千代共撰
近松語彙

あ

***あいくろし** あいくろしげにほのめかし、泣いていふさまへ戀らしし用天皇お茶持ておちややと待遇ば、あいくろがうししの若神子の口と口とも寄せまほし(卯月紅葉)

***あいくろし(愛)**の釋。愛嬌ありてかはゆるし。「あいくろがうしは、あいくろしに黒格子をかけたのである。黒格子」をも見よ。

***あいさつ** 思懸けなき俄ごと、何の愛想も無い事やとあいさつあれば(扇八景)言はば此方ば人であらし、房とあいさつきれぬげ(重井簡)

***挨拶** 應答。應對。情交。挨拶切るとは、交際を絶つ、情交を絶つ意。挨拶と云ふ語は、葛長庚の鶴林問答篇に、「昔者天子登封泰山、其時土庶挨拶、獨君一縣尉不行、而前呼曰、官人來、衆皆靡然」と見え、挨拶は、擧げ前にあるものを推除けて進む意で、應答の意ではない。禪祖照等編の圓通大德師語録に、「塞外將軍令、二老漢等開一挨拶、自然風行草偃」と見え、この一挨拶といふ禪語が挨拶となつて、普通にふ應答の意に用ひられることになつたのであらう。

***あいぜん** 不動・愛染・大師様(歌念佛) 衆人愛敬愛染の威徳も見えて頼もしし(永明日) それまでは愛染様(参らうと)儘なれども(永明日)

(愛染愛染明王の略。愛染明王は佛説八大明王の二で愛染を司る。愛染は梵語の羅漢)。

の譯である。羅漢は親愛・染色等の義であるから、愛染と譯されたのであらう。三目六臂で忿怒の形相をした神である。金剛法經に「身色如日暉」、住於燃燈佛、三目威怒視、首髻師子冠、利毛忿怒形、亦鈿安在於師子頂、五色垂髮垂天帶。」

***あいだてなし** 「あいたてなし」をも見よ。
***あいたてなし** 一つの子供に引分けて、譲ると思つて死する身が、生きたからうか惜しからうか、あいたてなしとも狂氣とも、笑はば笑(用明天皇)

***あいべつりく** (舞丸) 「京別離苦哀別離苦は八苦の一で、涅槃經に説く所である。宇宙の萬物は因縁假に和合して成れるものであるから、その因縁はまた九盡きる時がある。今ここに會すと雖も、また必ず別離の哀しみがあり、離散の苦しみがある。拆立記に「常所親愛之人、乖違離散不得共處、是爲哀別離苦」。

***あいまんじきんののみきん** (用明天皇) 「哀戀自譚之御」の說。「譚、講東方香韻清淨云々」を見よ。

***あいまちやう** 「まんざら」を見よ。
***あいろ** 物のあいろの見えざれば、松明出せと呼ばはる聲(百日曾我)

あやいろ(文色の略。あやめ。差別。和訓栞に「あいろ。文色の義なるべし、あいろの見えぬなどいへり」。

***あうあう** 學ばずして石公孫吳の兵

術に通達し、その名あうあうとして隠れなく(川中島) 「中央」鮮明なる状にいふ。詩經卷九に「出車彭彭、旂旐央央」とありて、毛傳註に「中央、鮮明也」。

***あうむがへし** 笑止に存する大臣と、鸚鵡返しのおて言(浦島) あら者どうしの鸚鵡返し(扇八景)

***あうん** 物には阿吽ある故に(卯月紅葉) 阿吽の息も消え消えと、のつかへしつ苦しむ聲(萬年草) サアこいやつと踏んだる足は阿吽の二天、飛ぶが如くに駈けて行く(川中島) 綱は鞘を持ちながら塀の上に突立つて、脱合うたる煩魂、阿吽の二王に異らず(酒吞童子) 煙草の息に阿吽の輪を吹き(虎が窟)

「阿吽」阿呬とも書けど、要するに漢字を配したるもの。梵語で「阿」は字母の初韻、「吽」は閉口の終聲であるので、この二字は法界萬有を擧げてこれを攝し、法界二面の兩極の各一を示すのである。これを氣息に配して、阿吽を呼吸の義とし、阿吽の息ともいひ、また寺門の兩側に立ちて、「一口を開き、一口を閉じた金剛力士に配して阿吽の二王といひ、金剛力士は天部に屬する神なるを以て、阿吽の二天ともいひ、口鼻と出る煙草の烟の輪となるを阿吽の輪といふ。阿吽については祕密佛敎で詳説するのである。

***あおり** 響の音はばりり入りん、あ

あいくろし—あおり

おりの音はばたばた(鐘櫃三) あぶり(障泥)の説。その條を見よ。

*あか 佛の関伽と碎かれて(酒呑童子) 袈裟御前の遺骨に土砂振注ぐ

関伽の水(心五戒魂) 枝折戸の外 関伽木ヲ阿伽と云ふ。水を云ふ。この語蓋し梵語アルゲハ(Argha)の説であらう。Arghaは祭供又は供物の意であつて、印度では神佛に物を供へるに必らず水を添へる習慣があるによつて、それより轉じて水を云ふことになつたのであらう。

名義集二に「阿伽此云水。関伽の水といふこと重語のやうなれども、古來用例多く、佛書にも見えてある。大日經疏十一に「関伽水、此即香水之水。関伽伽とは、佛を供養する水。香花など敷せる謂。」

*あか こちの人、娘が垢をぬがししやれ、うろたへて娘一人捨てさつしやるな(萬年草)

「垢」垢を脱ぐは汚物を取去る義。汚名をすすぐ。冤を雪ぐ。

*あかいわし 長が赤鯛の小鯛がくさの、俺どもが脇腹さなへ當るが最期(博多)

「赤鯛」鹽漬鯛。乾鯛を赤鯛といへば、夫の如く「赤鯛」となれる鈍刀「長か」は長い「長崎鯛」に赤鯛となれる鈍刀「長か」は長い「長崎鯛」の胴に加賀草くれ紅の調(喜安)

正しくは「あこ」で「あこ」の延びた語。初代阿古は東山時代鼓筒作の名工。此流に吉道、長兵衛、友房などの名工がある。阿古長兵衛は寛永頃京都高辻御幸町住。詳しくは鼓筒之鑑定(大正六年刊)を見よ。

あかがねさかやき 岩木忠太兵衛六

十八でも生得堅氣、銅月代刺立て(鐘櫃三)

「銅月代」月代を割つた頭の銅色に光ることを。鐘櫃調。

*あがねのふきや 「銅の吹屋」ふきや(吹屋)を見よ。

*あがき 刺さつて立つ程に(鶴迦) きを打つて立つ程に(鶴迦) 早く寝させて疾く起し、晝あがかせたが萬病園(鐘櫃三)

「足掻」馬が前足を地を掻きまじる。兒童がいたづらしてはね廻る「あがき」は轉成名詞。あかさかやつこ、こりや大名のお通りだ、先のける、振込めさ赤坂やつこひげ奴(隅田川)

「赤坂奴」江戸時代、袈裟などを持つて供する若黨小者をいひ、多く江戸赤坂邊に住んでゐたのでこの名がある。

あかしちぢみ 心ざし行く須磨の浦、明石縮のちりちりと、上る朝日の東山(松風)

「明石縮」縮の文より産出する縮で、夏衣に仕立す。この文は、須磨の浦から陸地の明石につづけ、明石縮のちりちりである。明石縮は里林子作の佐佐木先陣、まつよひしぐれ道行の中にも「彼のちぢみの明石縮」と見えてゐる。越後の本場では、京都人の明石次郎が文政年間(越後の小千谷に移住して、京風の縮方を傳へて)縮縮を始めたのが明石縮の元祖だといはれてゐる。

あかしのきみ 名を繪合とつけたるも、空蟬・夕顏・若紫・明石の君におしづつき、ならびなしとの心かや(千疋犬)

「明石の君」源氏物語中に出る美女である。詳しくは明石の巻について見よ。

この文は、源氏物語に繪合といふ巻があるから、それより源氏物語に見える美女の名を引いて來たのである。

*あかぞめのあもん 供御は赤小豆に赤染の右衛門、けたかきだいら雛(本領曾我)

「赤染右衛門」内裡雛の一として赤染右衛門を擧げたるのである。赤染右衛門は赤染右衛門尉時用の養女となり、宮掖に出入し、藤原道長の養子に仕へ、後に大江匡衡の妻となる。三十六歌仙の一人。

あがためしのもく 縣召の除目は吉日に任せ(百合舎)

「縣召の除目」諸國の國司を任する儀で、毎年正月十一日から三日間に行はれ、専ら地方の官を任するが故に外官の除目ともいひ、春季に行はれるが故に春の除目とも云ふ。除目とは官に除し目録に記す意。

*あかねさす 東の山に茜さし、ばや月代ぞあがりける(用明天皇)

「茜」茜色の差出る義で、日光また月光の地平線上に反射し初めるをいふ。茜の差出る義から、日紫などの就詞とすることもある。

赤松梅龍 見るかげ細き釣行燈、太平記講釋赤松梅龍と記せば、玉が爲に(伯父ながら)(大經師)

*あかまへたれ 泊り泊りの赤前垂にしやくら致さないやうに(丹波與作)

「赤前垂」京阪地方の色茶屋の仲居や、東海道五十三次などにて、料理屋・茶屋・旅館などの客に接する下女は、皆赤前垂をしてゐた。都繪馬鑑巻之五に、「女の赤き前垂をしたる女屋の下女は皆これをせしが、今は色々の染漬或は紺縮緬に變ず」とあり。丹波與作の中に「君待受けて、解く前垂の赤坂や」とも見えてゐる。

あがまへる 様に様をつげあがまた(倉橋山)

あがめる(崖)のめをまへと延した語。あがりの衆 上りの衆ならば土産召せ召せ(百合舎)

「上りの衆」田舎から上方(京阪地方)へ上り來る人々。

あかりも 牛膝・あかりも二十日草(用明天皇) あかりもとは燈心草(用明天皇)

「燈心草」細細の異名、その心を燈心となすより明燭とも云ふ。

*あがる 脈があがつた死病も(大經師) 伯母さへ死ぬれば科は一人に極つて、脇差は上り物、外に御詮議ば残るまい(女腹切) 謀反の輩の上り屋敷の明地多し(最明寺殿)

「上」脈があがることは脈搏無くなるをいふ。「上り物」とは廢物「上り屋敷」とは、江戸時代、犯罪人から官に没収した宅地をいふ。

あかれる どう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ(安楠)

あかん 乳母侍女阿監役の官女附
添ひて(國性爺)
〔阿監〕官女取締役の官女、白居易の長恨歌に「殿前阿監青娥老」。

秋ざれば 秋ざれば月のさばりと
泣き歎きつる(鶴九)
〔秋にしあれば〕「しあ」が約つて「さ」となり、「秋ざれば」といふのである。秋になればの意(「秋ざれば」といふが、これは秋は「あはれ」の「しあ」が約つて「さ」になつた。)

あきつみち 實相中道の佛の教、神
の法、皆一筋の秋津道、傳はる種
や和歌の文字(用明天皇)
〔秋津道〕秋津島の道。數島の道。秋津島はもと大和の葛城山の地名で、孝安天皇の皇居以來「秋津島夜鷹」の稱があり、後遂に秋が國號として用ひる事になつた。

あきなすび 揉瓜になれなれ茄子秋
茄子、嫁を識る姑ばなし(卯月潤色)
〔秋茄子〕秋茄子に食はずなどいふ諺によつたのである。秋茄子は核少く好味であるから、姑は嫁を憎んで秋茄子に食はずなどいふ。一説に、秋茄子は核が少いから、嫁に食はして子が少うてはならぬといふ、この説に従はぬ。この文は「瓜の聲に茄子はなられ」といふ諺を逆用して「揉瓜になれなれ茄子秋茄子」と面白ういうたのである。

あきなひみやうり 今は粉屋の孫
右衛門商冥利、女房限つてこの文
見せず(天網島) 沙汰して私徳もな
し、商冥利隠密なり(歌念佛)
〔商冥利〕商人としてこの身が偽らば、佛神が隠密の間に下し給ふ利益をばづれて蒙らぬ

あかん — あくのや

ぞ、といふ意で自誓の詞である。「けいせいみやうが」の條をも見よ。
あきよよ 高砂やこの浦船に帆をあきよよ、天鼓
〔あげ揚〕「ようよ」のつまつたのである。揚げような。高砂やこの浦船云々」を見よ。

あきささめ 女子の身で代官所を秋
納まで語合つて(丹波興作)
〔秋納〕農家の秋の收穫をいふ秋のとりいれ。以後漢字類抄に「西政」。

あき 一平家の一族悪七兵衛
義清(十二景)
〔悪〕其八の意趣の惡強い意、地味強い意にいふ。景清は伯父大日坊を殺し、義平は叔父賢賢を斬つたから、惡を添へて惡の意にいふとの説はよくない。人の實名を稱呼の上の惡の字を冠したの、十の九まで當人が世の間に得たものを其死後まで持越す例である。

あぐし 悪業無盡の罪人
〔悪業無盡〕罪惡のありたけを爲盡すこと。

あぐし のたかまる 伯耆の國の大山
にて愛宕高雄の天狗ども、あぐし

のたか丸に傳へし所の兵法を型の如く奥儀を極めて候(大掛物)
田村の草子(室町時代の小説)に「このくれにはあふみの國にあぐしのたか丸出て世のさまたげをなすべし云々」とありて、坂上田村麿に退治された鬼の名である。

あぐしやう 女房は夫の惡性おし
つつみ(重井翁) いや、こも小よしの
惡性で、つい押せばはなれる
(丹波興作) 旦那の惡性銀を十四貫目
横取りして(淫龜)
〔惡性〕悪しき性質の義、よつて放蕩、淫奔、好色の意にいふ。〔惡性銀〕とは破綻で遊興に遣ふ銀のこと。

あぐし 延べてあぐしやう(正しく)あぐし
くしやう)ともいふ。傾城佛の原に「三國の
れけある里へあぐしやう通ひの面憎や」と見
え、冥途の飛脚に「悪しやうぐるひも出で來
るぞと父御前の思案」と見えてゐる。

あぐし 遊里に足繁く通うて遊女にうつつを抜
かすこといふのである。また女殺油地獄
に「世間の義徳を缺いても金借つて惡性所
拂して」と見えてゐる。惡性所は惡所の念入
過ぎた語である。川柳の句にも「惡所とは罰
のあつた言葉なり」と見えて、惡所は遊里
のことである。

あぐし 借金つて惡性所の拂して」とある
「借つては言ふまでもなく、借りての音便
である。關西地方では「借りて」を「借つて」といひ、「買つて」を「買うて」といふたもので、果林子の文を讀むにはこれらことに
め注意すべきである。

あぐし 三途八難の惡趣に墮す
〔惡趣〕趣は往到の義で、善惡の業因によつて

響くべき所。阿毗達磨俱舍論・世間品に、「趣謂所往。地獄・畜生・餓鬼・三惡道を三惡趣」と云ふ。
あぐし (天網島)
〔あぐしやう〕見よ。

あぐせのえん 時の坐興の深戯も、
過去の惡世の縁ならめ(鐘三三)
〔惡世の縁〕縁は宿世の縁、前世より惡い因縁をもつて生れて來てゐること。

あぐち 相宿の關札誰に憚ることあ
ぐちども、もとの如くに札立て直せ
(堀山姥)
幼少の者の口邊に生じるぶつ／＼した小さい腫物をいふ。思ふに「あぐち」は惡血で、胎毒によつて生じると思はれた名であらう。あぐちも切れぬ小件とは、口頭にあぐちが斷絶しないので、まだ生じてゐる小腫といふ意。今様二十四孝・寶永六年刊・卷之三に「總じて近き世の人の振舞、あぐちもいれぬ分として古老先輩を乗越し、鼻のさき智恵をしたり顔にの／＼り云々」(産屋通傳大内鑑、第五に、「時明とやらあぐちもいれぬ小件、陰陽道の秘術、こは事をかき奏聞」。

あぐちだか 斷惡修善の臍當をあぐ
ち高にいつか(穿き女、安島)
〔あぐち〕はあきく(明日)の略。臍當は足袋など穿入る口をあぐちといふ。あぐち高とは、あぐちを上高くすること。高臍者若舞曲に「熊の皮のみ足袋、しなれねにてへりかねたし、あぐち高にふへりたり」。

あぐち 勅使あぐちのやに入り給
ひの、神官樂人に對面あり(三世相)
〔唯舍〕國政或は大祭など行ふ時、新に假屋を設けて齋場となす建物。

三

あくべなし 年明くまでの月日をあくべなう思召されてか、但は世を見限つての通世か(吉岡集)

あくめ 今朝曉の鷄・鐘も一つ枕に聞いた仲・何をあくめに離別とは(會稽山)

あくらい 龍象の波を蹴立つる四足の働き、悪來が多方にも止めつづうは見えざりけり(關八州)

あくめ 惡來殿の村主の臣で多力であつた。史記殿紀に「飛廉主惡來、惡來有力、飛廉是也、父子俱以材力事紂」。晏子春秋に「惡來手裂虎兇」。

あくめ 先御馬はあけ七歳、八寸八分に立伸びて(大磯虎)

あくめ 明年明けの義。あけ七歳とは、年明けて七歳になる馬。

あくめ 眉間肩先斬下げられ、あけにそみてよろよ(扇八景)

あくめ (朱)あか(赤)の鞆。赤。鮮血。

あくめ よれ様達も、こちの揚で參らせました(水明日)

あくめ 揚遊客が眞屋(遊女を抱ける家)から揚屋(遊女を抱きて遊ぶ家)に遊女を呼寄せること

あくめ 山鳥一羽のし來り、栗の梢にあげきして、翼をすくめとまりけり(虎が屠)

あくめ 揚木)枝葉を押し上げてもりこむこと。鶉鶏類が逃げ隠れるときにはこの習性がある。

あくめ あげき 揚木)枝葉を押し上げてもりこむこと。鶉鶏類が逃げ隠れるときにはこの習性がある。

だす(二枚繪)

揚屋(擧句とも書き、連歌・連俳の始めの句を擧句といふ)に對して、最後の七七の二句を擧句といふのが轉じて、終末の意にいふ。

あげすけ 籠輿になりとも、嫁入の興になりとも、あげすけの返事し

たがよい(娘)

あげすき(明透)の義であらう。物を包み隠さぬこと。心根を隠さないで打明けること。

あげすき 助六心中并せみのあけがら(吉留新編)に「よろづ屋の助六とて、男自慢にのぼせり、今はしんたいすつきりすけ六」とある「すけ」も、選いてある意を助六の名にひかけたものである。

あげずの門 かけ廻つても奥方の勝手ば知らず、中口のあげすの門碎けてのけと扉を叩き(反魂香)

あげせん 九月からの揚錢萬事十五兩程と覺えた(冥途飛脚)

あげせん 九兩二分の銀(二枚繪) 扱は揚錢入らずか、(扇八景)

あげはのてふ 幾夜も幾夜も揚羽の蝶(賀古教信)

あげはのてふ 揚屋の庭に、揚屋への附届け。

あげはのてふ 異本洞房語聞、上に「京都の揚屋に庭せんといふ事あり、正月三月五月七月九月、此五節句を約束るときは客人より出之、太夫は十三貫、天神は五貫、團は三貫文、元祿太平記五に「都の手替り定た禮儀あり、其わけは太夫正節句、女重實記二に、「道具をつかはす次第(婿禮の際の方より)はまづ一ばんに庭錢、但し昔さしにつなぎ、次に長持云々」と見えたる。揚屋で遊女を一夜妻とすることも、男より揚屋へ婿入するに當れば、庭錢を出したのであらう。又太夫から揚屋家内にかへる祝儀を庭錢と云つた。』にはせん」をも見よ。

あげまき 繼信が着たりける鎧の胸

あげまき 頼朝の板押付あげまき(凱陣八景)



【ふてのはげあ】

揚巻取つて引立て(鎌田)

揚巻(角巻とも書いてある。鎧の押付けの板の次にある板(肩の稍下方)を逆板また揚巻付の板といひ、この板に鎧を打つて揚巻といひ、揚巻の總を附ける。押付けの條をも見よ。

あげまり 天晴今日の曲鞠に、子供が名をもあげ鞠と、莞爾と笑ひし

老の顔(持統天皇)

あげや 親代代の刀屋を太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた(女腹切)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

あげや 揚屋の庭錢(籠門松)

舟の(三原忠)

網子)網ひく漁夫。萬葉集卷三、雜歌部に「大官のうちまて聞ゆ網引すと網子と、のふる無人の呼聲」。

網子と、のふるとは、網をひかうとして多くの漁人を呼集るをいふ。

あご 下部ともあご取持たせ(松風)

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

あご 網具の鞆。

の地より産出する食鹽を赤鹽といふ。和漢三才圖會補遺土産の條に鹽赤鹽。

あこめ 唐織・唐綾・襷・練衣(曾我五

人兄弟)

「日本の衣服の名で、綾又は平絹などで作り、表着唐衣などの下に着たるものである。小袖のまりの如くたりくびにまりをきして大きくびなく、左右の腕を縫合せ、袖は廣袖で、たけは、裸までとく。安齋隨筆、卷五に、「此衣(襷)は表着唐衣などの下に着るものなり、男の襷は女のと異趣違ひたり、襷は俗字なり、襷は正字なり、玉簪に相は女袂切近身衣也、日々所著衣也と註せり、此方の襷は肌に直ちに近づけては着ざれども、男女共に装束の下に著る衣なれば、身に近しい義に違はざるか、肌には白小袖を着るなり、小袖と云ふは九袖に縫ひたるを云ふなり、小袖の上に襷を着るなり、初は男女共に四角なる廣袖なり」。

近松の二の文、襷は衣服の名であることを誤つて、幾と混同したのであらう。幾は籠の目のやうに細くちぢれて、透き通るやうに薄い絹織物である。

あこめの小袴裾くくみ(并筒)

「襷の小袴(安齋隨筆、卷五)に、女の袴、女の扇を袴袴袖扇といふは、袴を着る時に用ふる故なり云云。

あこぎやう それ六字の名號といは、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字を接し(百

日會校) 華嚴經にて中戸に口説き、阿含經にてむらさき見そめ(扇八景)

「阿含經」大藏經中に收まれる小乘部經典の總稱で、増一阿含經、長阿含經、中阿含經、雜阿含經を四阿含と稱し、小乘經の根本經典である。

「うけごんぎやう」の條を見よ。

あざ さんまあざがけしのきつ(大雜冠)

「あざぶの明神釋迦牟尼佛(女殺)博奕のめくりかるた四十八枚ある中の札の名。博奕仕方風聞書に、「雪敷をあざと唱へ、金泥にて彫色、此札數五十に相成」あざぶの明神とはあざ札に麻布(かるた札はもとの麻布で造つたより)をいひかけ、これに明神を添へて、神様の名やうに物體ぶつたのである。かくかるたに明神を添へていへる例は、五箇の津波情男(元禄十五年刊)卷之一に「この事柄ならば、か大光明の御影を褰り云々」と見え、か大矢吹(延寶九年刊)卷二に「かるたはあざ打出し風涼して(大移)」「うんすんの條を見よ。

あざがほ 瑠璃びいどろの朝顔で、味淋酒飲んでまします、古郡殿の奥様ぞや(本領曾我)

「朝顔朝顔茶碗の略で、上方に開き下方窪んだ茶碗。男性大鑑、七に朝顔焼の天目出し」。

あさきど 既に今年の酉もたち、戌の顔見世、朝木戸を曙深く提燈の(二枚巻)

「朝木戸」木戸とは劇場の入口をいふ。竹野故事(寶曆六年刊)に「櫓と云城戸と云は、城廓に準じて大切な名目なり、後世城の字を恐れ木戸と稱す」。昔時芝居は概して拂袖から開場したれば、朝木戸というたのである。この文に「酉」とあるは寶永二年乙酉をいふ、「戌の顔見世」はその條を見よ。

あさぐつ 髻を取つて引伏せ、履いたる浅沓碎けてのけと、腰のつがひをさんざんに踏付け(松風)

「浅沓(表着服用の時に履く沓で、桐を彫つて作り、外部を漆にて塗り、内に絹布などを張る)には、外部を漆にて塗り、内に絹布などを張る

あさくらや 朝倉屋から青山椒、内

には、あざぶの明神釋迦牟尼佛(女殺)博奕のめくりかるた四十八枚ある中の札の名。博奕仕方風聞書に、「雪敷をあざと唱へ、金泥にて彫色、此札數五十に相成」あざぶの明神とはあざ札に麻布(かるた札はもとの麻布で造つたより)をいひかけ、これに明神を添へて、神様の名やうに物體ぶつたのである。かくかるたに明神を添へていへる例は、五箇の津波情男(元禄十五年刊)卷之一に「この事柄ならば、か大光明の御影を褰り云々」と見え、か大矢吹(延寶九年刊)卷二に「かるたはあざ打出し風涼して(大移)」「うんすんの條を見よ。

「朝倉屋」恒馬屋(山椒屋)に朝倉といひ、山椒の右旗屋(山椒屋)に朝倉といひ、屋號を用ひて青山椒と書き連れたのである。

あさこみ 出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「朝込」朝込入る義で、朝に用ふる語なるを、遊廊に朝込入る事に輕用され大語であつて、遊治郎が未明から遊里に出懸け、大門の開くを待つて入り、馴染の遊女を呼んでちよつと床入するをいふ。蓋し遊女は片時も傍を離さないで何時までも多附いたやうにする野暮客に、掛けられぬのも多附いたやうにする野暮客に、それよりか互に思合ふ(大朝置男とちよつと願を合し、聽て用事を済して別れるのを氣晴しとしたのである。西鶴算の御簪用、卷二、尤も始末の意見の條に、「紙子頭巾深々と被り、山椒の粉胡麻の粉を糺り廻りて悲しき年を取り、心浮々々と丹波口まで行く中に、夜は明け方になりぬ、世にある時の朝込思出してぞ歸りし」とあれば、朝込は夜の明け方頃にしたのであることが知れる。好色伊勢物語(貞享三年刊)に「朝ごみ。朝來見と書けり、あした来てまみゆと詠めり、凡そ扇原の一番門といふ事あり、此町七つ鐘のなるなり、初めてよるの門を開く、宵に首尾なき男此一番門に來りて

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

「あさこみ」出舟の今日の名残の床、明日のあさこみ枕より、跡よりやり手の責めくるは、呵責の責より

あざばね つんばればあざばね、にぎりのそろでぞ勝つたりけり(大雑冠)「つんばね」を見よ。

あさひな 朝比奈ならねば門破り詮方盡きて立ち居たり(今意)「朝比奈」この文は、朝比奈三郎義秀は建保元年五月和田合戦の時鎌倉朝所の南門を破つたが、二郎兵衛は義秀とは違つて力の量なだければ、詮方なう立つてゐたとの意。

あさぶさ 二人の子供が朝ぶさ前忘れす、必ず桑山吞ませて下され(天網島)「あさぶさ」朝物を俗に「あさぶさ」と云うた。朝食より前に朝食すること。俚言集覽に「夏山雜談」朝朝物は、餅糰菓子類を年中毎朝河端(喜道)といふ朝菓子師より調進すとなり、民間にても、朝食より前に何か喰ふ事を朝物といふはこの餘風なるべし、今俗に女子の詞に朝ぶさといふ是なり。

あさふのまつわか 先づ當國の名木は西行が汐越の松、あさふの松若が物見の松(反魂香)「麻生の松若」麻生は淺生とも書く。越前國足羽郡麻生津郷をいひ、松若の屋敷跡がある。松若は盜賊の名である。隱雁記に「淺水里に松若といひし盜賊の住所なりし」とあり。跡あり。謡曲「熊坂」に、「さて北國には越前の淺生の松若、三國九郎、加賀には熊坂の此長範を始めとして。」

あさぶのみやうじん 「あざ」からたの繪のつく云々」を併せ見よ。

あさみぐさ 根は戀草の深見草、あさみぐさとは思はじと(十二段)

あさみぐさ 根は戀草の深見草、あさみぐさとは思はじと(十二段)

あさみぐさ 根は戀草の深見草、あさみぐさとは思はじと(十二段)

あさみぐさ 根は戀草の深見草、あさみぐさとは思はじと(十二段)

あさよみゆ 家来ごとに朝もよひ、よろづに心もみ瓜を、きざむ音さへ比叡の山(堀川波鼓)「朝惟朝飯の支度をする事、まははその時分。今昔物語 卷二に、「あさよみゆとは、朝もて物食ふ時を云ふ也。」

あさやま 昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け(倉橋出)「朝山」朝の山狩。

あざらけし 此宮遂に人間の乳を吞ます、あざらけき魚を好んで、魚の脂にそだち候ゆ(松風)「鮮」あたらしい。仁徳紀に、「鮮魚」。

あざらけし 此宮遂に人間の乳を吞ます、あざらけき魚を好んで、魚の脂にそだち候ゆ(松風)「鮮」あたらしい。仁徳紀に、「鮮魚」。

あざらけし 此宮遂に人間の乳を吞ます、あざらけき魚を好んで、魚の脂にそだち候ゆ(松風)「鮮」あたらしい。仁徳紀に、「鮮魚」。

あし 四兩あしもごさるか(水朔日) 三百文のあしを捨て(今川了俊)「脚」中古、錢を要脚といひ、女言葉に「おあし」といひ、それより俗に錢をあしといふ。要脚は腰脚である。易林本節用集に「要脚、錢也。白玉擔詩に「腰下有錢三百足」おあし」をも見よ。

あし 四兩あしもごさるか(水朔日) 三百文のあしを捨て(今川了俊)「脚」中古、錢を要脚といひ、女言葉に「おあし」といひ、それより俗に錢をあしといふ。要脚は腰脚である。易林本節用集に「要脚、錢也。白玉擔詩に「腰下有錢三百足」おあし」をも見よ。

あし 四兩あしもごさるか(水朔日) 三百文のあしを捨て(今川了俊)「脚」中古、錢を要脚といひ、女言葉に「おあし」といひ、それより俗に錢をあしといふ。要脚は腰脚である。易林本節用集に「要脚、錢也。白玉擔詩に「腰下有錢三百足」おあし」をも見よ。

あし 四兩あしもごさるか(水朔日) 三百文のあしを捨て(今川了俊)「脚」中古、錢を要脚といひ、女言葉に「おあし」といひ、それより俗に錢をあしといふ。要脚は腰脚である。易林本節用集に「要脚、錢也。白玉擔詩に「腰下有錢三百足」おあし」をも見よ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしあらひさぶらひ なんと金吾、足洗侍成上りの手際を見たか(井筒)「足洗侍」外様侍の低い身分から出世した侍。成上り侍。譯に賤業を廢して正業に就くを足洗ふといふ。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

あしがる 昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に、千石にもなりあり(女稱)「足輕」足が軽くして能く驅走する義で、雜兵をいふ。平時は甲を飾り、驅使・雜役に服し、戰時に軍陣の歩卒となる。

足の爪先を内方に向けて歩むことで、女の歩む足つきをこれを内八文字うちやじりともいひ、男の歩む足つきを外八文字そとやじりといふ。「はちもんじ」をも見よ。

***あしのまろや** あしのまろ屋のぼなれ庵(一心五戒庵)
〔蘆の丸屋〕蘆などで假初に葺きて作れる家。小屋の屋根を四方から一様に葺いて、頂上下一所に葺寄せれば屋根の形が丸く見えるから丸屋といふ。

***あしひきの** 二度難波の故郷へは踏み返さじと、あしひきの大和の國平群谷(卯月調色)
〔足曳の山〕は足即ち山籠を曳けば、足曳の山と云う。山にかゝる枕詞とし、山を大和にかけて大和の枕詞としたのである。足曳の山鳥など、云ふもこの類である。

あしかい 地鐵は後で算用と、横座に直つて足輔(永朔日)
〔足輔〕柄を足指に挟み、足を屈伸して風を起さす輔。

あしぶね 知らずや、人の世を渡る一生の危きこと、この蘆舟に劣らんや(聖徳太子)
〔蘆舟〕蘆葉に乗るを蘆舟に劣るといふ。

あしもとのねばいは三河者(足波與作)
脚強くして歩行に容易に疲れぬを、足元が粘5と云ふ。この文は、三河に響を掛けて、「足元の粘りは三河者」というたのである。膠は粘着力が強いから、かくいひかけたのである。

る。鳥九光廣の狂歌に「にかわの園といふべかりけり」と云ふ句もある。
***あしやう** 亞相(勿取直し)女夫池(亞相大納言の唐名。亞は次の義で、宰相に次ぐ意。)

あしやがま 今は團扇の繪、葦屋釜の下繪に露命をつなぎ(反魂香)
〔葦屋釜〕筑前葦屋の里で鑄た釜。黒川道祐撰の蒲州府志卷七、土産門下に「釜。煮沸湯の具也。中古於蘆葦葦屋里所鑄。號葦屋釜。其所鑄之紋畫、僧聖舟之所創者問有之、後俗喚酒之御器謂之間鍋、今有狩野探幽并永直等之土畫也。葦屋釜は土佐信が都の亂を避けて筑前國蘆屋の里に下り住んだ時、其里人の製造する釜の下繪を描いて、その模様を入れて鑄かしたものである。蘆屋釜の下繪を蒐集したものに「蘆屋のけふり」と云ふ本があつて嘉永五年頃に出版されてゐる。

***あじやせたいし** しゆりばんどくの阿房(でも)女戯
〔阿闍世太子〕釋尊在世の時、印度摩揭陀國にみたるで、釋尊の法敵である當時、父王の類惡婆羅を弑し、母后の婁提希夫人を幽閉した程の大惡人であつたが、終に釋尊の感化によつて佛教に歸依し、佛敎の爲に貢獻する所が多かつた。詳しくは佛無量壽經などを見る。持統天皇歌聖法に「昔五天竺の主、頻婆娑羅王の太子、阿闍世太子は過去生よりの惡人にて、憍母婁提希夫人を鐵の牢に押込め、無數の苦處を見せたまふ。」

あしをわ 阿修羅王が加勢して神變通力をふるまふ(兼田)
〔阿修羅王〕阿修羅は梵語Asuraで、非天と譯し、印度鬼神の一種である。諸阿修羅の長を阿修羅王といひ、梵天・帝釋と

闘争する鬼神である。
あしよわぐるま 打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、御所の此方に駒を控へて見渡せば(最明寺殿) 親の輪廻の足弱車、狂ひ巡りて行めば(備田川)
〔足弱車〕輪の弱い車をいふ。馬の脚の弱いに喩ふ。謡曲・鉢の木に「うてもどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗力なければ追ひかへたり。」

***足を空** 日が暮れると、足を空に立歸り(冥途飛脚)
足が空を飛ぶやうに、夢中になつて急ぎ歩くをいふ。源氏物語・葵の巻に「足を空にたれもたれもまかて給ひぬ。」

あしをなが 黃絲の腹巻赤銅作の打太刀、足緒長に結下げ(抱符)
〔足緒長〕太刀の帯取を足緒といふ。太刀の足緒の長いこと。

あそぎこ 此善根を以て、まさに無量阿僧祇劫に於て自在の王となり(聖徳太子)
〔阿僧祇劫〕梵語阿僧祇劫 Asankhya Kalpa の略。阿は無、僧祇耶は數の義、劫は極めて長大の時間をいふ。阿僧祇劫とは數ふべからざる極めて長大の時間をいふ。「佛勝鬘夫人に記を授けて曰く云々」を見よ。

あそびけ 髪より多きあそび毛を、襟引締めて隠せども(日本武尊)
〔遊毛〕結び濡れた髪、また領脚の邊に生ぜる短き髪。

あそふのまつわか
「あそふのまつわか」を見よ。

***あた** あた仔細らし、いおどしだて

〔大經師〕 あた聞きともない、通りや反魂香 奥様はうつすり鼻明けてしまはんしよ、小むやうしいあたぶのわるい(夕霧)
嫌惡の意をなす語「あた分の悪いとは、いかに割が悪い」と云ふ意。

***あた** 人の願ひも我が如く、誰をか戀の祈ぞと、あだの情氣や法海寺(曾根崎) 通ひ車は小町があだの情にませられ(歌念佛) 南無阿彌豆腐なまいで、あああむあむいだ、あだくち念佛(常盤) 朝の露に生残る、それよりもなほあだくちへ(三枚巻) あしたの雲ゆふべの霜、あだしが浦のうづば舟(重井筒) あだしが原の道の霜(曾根崎) あだしけぶりの梅田の火屋(實古教信) 何をか後世のみやげと、いざしら露のあだし野や(夕霧) うかれぞめきのあだ淨瑠璃(天網島) あだし世に生きて物を思ふ(より) 凱陣(八島) その豫言もいつしかに、あだ寝の夢の博勞町(今宮) 我も色賣る身はあだ花の、花に價の高下があれば(生玉) それを知らずにあだ惚して、この長作は捨てられた(生玉) あだ矢もなく雨の如くに射かくれば(蟬丸)

〔徒〕いたづら。むだ。かりそめ。はかないこと。「あだはまた他語と複合語をなしてそれぞれ意をなす。」

七

あしのまろや——あた

「あだの憎氣」とは、已に關係もなかり起すたづら憎氣。法界憎氣の意より法海寺につけ九のである。

「あだの情」とはかりそめの情。
「従口念佛」いたづら念佛。でたらめ念佛。
「従驚」もろくはかなきを驚べること。
「従しが浦」あだしが原などといへば、従しが浦とも云うたのである。「し」は語意を強める助詞。

「従しが原」無常の原。墓原などいふ。
「従し煙」無常の煙。火葬の煙などいふ。
「従し野」無常野。墓地などいふ。徒然草に、「あだし野の露消ゆる時なく云々」。
「従し世」無常の世。はかなき世。
「従し淨瑠璃」いたづら淨瑠璃。でたらめ淨瑠璃。
「徒花」咲いても實を結ばぬ花。
「徒徳」逃げ得ぬ徳。

「徒矢」むだ矢。中ちぬ矢。
*あだ 梅が枝の匂ひに移るあだ心(室町千疊敷) しんきしんきの空悋氣、終に我身のあだし草(龜權三) つくらふ影ぞあだ人に、かくともつげよ黄楊の櫛(抱朴)

前條の語意が轉じて、うはき。なまめいた風情。嬾嬌。「あだしぐさ」とは、浮氣の身の仇となる種の義にいらたのである。易林本、節用集に「嬾嬌」。

あた・あた ただ身が焼ける、あたあたとばかり御意なされ、お熱のさす折からは、あたり四五間の熱

「あいた、あいた」嗚呼痛、嗚呼痛の略。平家物語、入道逝去の事の條に、「身中の熱き」とは火を焚くが如し。臥し給へる所四五間が内へ入る者は熱き堪難し。たゞ宣ふこととて

は、あたあたとばかりなり。
*あたごちまき あたごちも皮を取らねば旨味は知れぬ(三國志)

「愛宕野」山城國葛野郡愛宕山なる愛宕權現に奉詣し、歸路家畜に買ふ糞を愛宕糞と云ふ。黒川道祐撰・日次紀事、延寶年中成六月二十四日の條に、「愛宕糞。今日愛宕詣歸、平日之千度、俗謂千日記、男女混雜不可、驅散或供百味、又獻米錢、而寺僧六坊之中入骨所、相知二坊、而休懸、坊人置酒食、是謂坊者、則買永札、歸路求權杖、著、厨之歸爲「苞苴」」。

*あだこ・はくさん 某が拜受の御馬半分づつ切取るとは、愛宕白山指もささば勘忍せぬとつめかくる(百日曾我) 嘘でないよの愛宕白山、八幡太郎義家に五代の後胤(雪女)

「愛宕白山」自誓の詞で、愛宕・白山の權現も照覽ありの意。

*あたたかな あたたかな事言はれなと聲をとがらし申しける(文武五人男) あたたかな、頼むとは何の口で、ちと利口振出さぬかい(孕常盤)

*あたたまる 二里の間を一貫四百、七百づつあたたまたつた(大經師)

あだて およぎつくやうに存じましても、身請をすべきあだてはなし(吉岡榮) 女子の身で代官所を秋納めまで請合うて、牢を出しは出されども、何をあだてに何とせう(丹波興作) こちと夫婦は當惑し

て、様様思案して見ても、今で請出すあだてはなし(水明日)

「頭語」各人同様の語をだしあはすこと。頭語の強は博奕で錢を賭けることをいふ語の用ひられたのである。「は」を奉照せよ。

*あぢ 跡から行くは連合か、夫婦あぢやと、さし合の悪口(唐船歌) 忍び付むて女夫の姿、夜見世戻りが氣を付けて、ヤアこつてりとあぢ(二) (定鹿) 親仁が手前をあぢに延引した(二救論) 心安い朋友なれども、申し憎いがあぢな氣質で、むざと物の言はれぬ人(鐘權三)

*あぢきなし あぢきなき世を捨て、道心の身と龍成り(五人兄弟)

*あぢくつ ムムムな男あぢくつな連れがある、また十九か二十ばかり、むまかもの根元(藥師)

*あたまのかかり 七本松から跡先に、これまで伺ひ参りしが、あたまのかかりがどうもなく、思はず慮外致せしなり(反魂香)

*あたまはり 小半切のけんどん酒、あたまはりに十文出し、びくにん呼んで念佛講(吉岡榮)

「味」うまいこと。よいこと。てきはよいこと。轉じて、風采りなこと。異なこと。俳諧集覽に「あぢななあぢなことあること、ろもちなど言ひて、常に異なる義なり。もと味より出でたる詞なるべし」。「親仁が手前をあぢにして」とは、親仁の見る前をさまく纏うての意。

*あぢくつ ムムムな男あぢくつな連れがある、また十九か二十ばかり、むまかもの根元(藥師)

うまくこつてりとしたこと。「あぢは味で、うまいこと。くつはつてくつな、うまいくつで、或種の語に添はつて語意を深うする語でうりくつ(理體)うへんくつ(偏態)などうくつが、聯想上からこんな語にも添はつたのであらう。

*あつゝ 内の勝手は知つて居る、必ず用心さつしやれ、身があつづけられ、どのよな事しようも知れぬ

「あいた、あいた」嗚呼痛、嗚呼痛の略。平家物語、入道逝去の事の條に、「身中の熱き」とは火を焚くが如し。臥し給へる所四五間が内へ入る者は熱き堪難し。たゞ宣ふこととて

「あだの憎氣」とは、已に關係もなかり起すたづら憎氣。法界憎氣の意より法海寺につけ九のである。

「あだの情」とはかりそめの情。
「従口念佛」いたづら念佛。でたらめ念佛。
「従驚」もろくはかなきを驚べること。
「従しが浦」あだしが原などといへば、従しが浦とも云うたのである。「し」は語意を強める助詞。

(生玉) 新七が言譯なく、身のあつさに斬つたと、皆手前のふみかぶり(淀鱈)

*あつかは 井筒がまさに業平の、といてかけたる常陸帯、あつかは女の(二重三重、帯はとくととも心とかせじ井筒) 惚れたとは厚皮な浦島) おやまやら總嫁やら、厚かはづらな晝日中(女腹切)

*あつかひ 喧嘩して濱納屋の下で、組んづ轉んづして居たをいくはなを見て来た。扱ひになりしやら、錢をついたもたしかに見た(歌念佛)

*あつきおりのへんからじま (淀鱈) (小豆織の傍刺綿) 小豆織とは赤と藍との綿で織つた小さい格子織の織物。傍刺綿とは綿が木綿絲・絹が絹絲で織り、多くは立縮である。黄金産業袋・五、衣服門に「赤藍の小格子。あつき島といふ。和漢三才圖會に、「傍刺綿、按傍刺、天竺國名、出於此綿、綿木綿、經絲似學而脆、多皺細條也。」

*あつきながみつ 重代のあつき長光 二尺五寸に手なかけ給ふ(川中島) (小豆長光) 備前長船の初代、長光作の刀をいふ。小豆が切れたと云ふ俗説でこの名がある。

川中島の戦に上杉謙信が敵の本陣に突入し、武田信玄を斬付け九刀は小豆長光であつた。小豆の飯の相伴 (國性爺) 昔から狐を稻荷明神の使と心得て小豆飯・油揚げを供するより、狐になぶられ魅されれば、それを幸に小豆飯の相伴にありつかれるといふ意。稻荷明神の使に狐をすることは、大御倉澤神の「けつ」がきつ(狐)に聯想されて起つたであらう。

*あづさみこ 黒格子のあづさみこ 参らざりて申しける(三世相) (粹巫) 粹神子とも書いてある。粹の弓を鳴して神おろしたる巫女(黒格子)を見。あづさゆみ 過ぐる月日は粹弓、ひくにとまらぬ世の中の(百日曾我) 粹弓(上古)は粹で作つたので、弓のこゝとを粹弓といふ。弓は引くより、引くにつづけ、また 粹弓矢の「や」(矢)から、大和につづけた祝詞である。

*あつた 椽先にあけ足して、やれやれやれ、あり様ぢちはあつたば、しゆもない(丹波興作) 「あつたは、嫌忌の意をなす「あつたといふ語に、音便を促音の加はつたもの。(ば)しゆもな」はその條を見よ。

*あつたら 髪は結椽ばかりで、あつたら此身が埋れ木ぢや(鐘樓三) あつたら肝をつぶした(博多) 何でもない奴等に逢ひ、あつたら汗を流せし(舞九)

*あつち 小栗もあわてて、的場の射塚に立隠れてぞおはしける(小栗判官) (安土御探ま丸堀とも書く。弓を射留ふとき、砂又は芝などで小丘を築いて、的を懸ける場。あつちのもの 次第次第に病も重り、金の鎖で繋いで、でもこの度はおつちのもの、醫者様だちのお咄(酒呑童子) (彼方吾彼の世へ行く者。黄泉の客。有つて過ぎた事 内儀様の諺もなぬ、それはあつて過ぎたこと(重井筒) 管てはさう云ふ事もあつたが、それは過去つた昔の事で今はさう云ふ事はないといふ意。つづと以前にあつた事。

*あづまからげ 今若はおとなしく、あづまからげに脚絆締め(烏帽子折)いと男にぬきかけさせて、あづまからげに佐保川押させ(吉野忠信) (東隣衣服の背縫の裾より七八寸上を掴み、之を帯の結目の下に折り込むこと。ちんちんはしよりむぢばしより即ち爺端折の音便)。

*あて 艶色あてなる二人の遊女 左右に別れ見えたるぞや(反魂香) あてに氣高きまなじりにてはつたと(眠み(烏帽子折) 高貴、品の高いこと。眞名伊勢物語に「高貴を「あて」とんである。「ああ妙」と嘆息した語であらう。「たへ」の反「あて」である。「一説に上手であるとも云ふうは」の反「あて」である) あてみ やばらあてみを稽古して(大經師) (當身) 柔術で、拳を相手の急所に突當てて、一時絶息さすこと。

*あどけなし わりなき涙のあどけなきを、男いよいよなかしがり(十

た一飛び梅田橋、跡老松の縁橋(天網島) 「おしまつて見よ。梅は背骨を轟うて太宰府に飛んだのに、松ばかりは跡に残つて縁を縁橋にかけ、老松に老松町(大阪西天満と曾根橋との間)をかけたのである。「縁橋」いつしゆの歌」の條を見よ。

*あとおひ あとおひ負ひたる高野聖(基盤太平記) (後負) 負は、後に負ふから後負ともいふ。おひ)を見よ。

*あとがやとや 八つの大鼓がでんでんでんば、あとがやとやのいたみへいげだ(水朔日) (二ノ文「八つ時の太鼓」に、太鼓、鉦で探すことをきかせ「たいこ、かなの條を見よ。その太鼓の音「でんでんでん」に傳法をいひかけ「跡がやがやとや」と騒ぐと云ふこと) 「跡が宿屋の傷み」逃げて死なれたは揚屋の損である故)をいひかけ「傷み」に「伊丹」をいひかけ、「伊丹へ行く」に「池田」をいひかけたので、さても自由な筆かな。傳法・伊丹・池田は大坂附近の地名で、この前の文に、「死なぬ先連れて北野」に「来た」をいひかけ、「死んだら體を梅田に埋めたい」をいひかけ「御無心ながら」「長柄をいひかけた、北野梅田長柄も大阪及びその附近の地名で、これ等探す方面の地を擧げたのである。

*あとぐすり 後薬とは申しながら、江南の橘江北に植うれば、根はつたとなとかや、所もかへて育て給はば、大智患者ともなり給は(彌迦) (後養) 手後の意にいふ。後ればせに手當すること。

九

あつかは— あどけなし

(二段)

無邪氣な。張合ない。當學語で深い思慮がない。あとじは相人の略で、和伎者氣無の意か。和訓姿に「あと。伎人の相手をつい、宗鏡録に、如三務加輕傷云、心爲工伎兒、意如三和伎者」見えたり、……新撰字鏡に誼議を訓ぜり、彼此之心相知貌と註せり、小兒などの同義なるべし、一説にあぢなしの轉訛と云、稿築狂言に、わきともあととも云ふ「あと」も相人の意であらう。

*あとじようり 茶でも所望にござらぬかと、表へ出づれば嘉平次は、あとじようりして入替り、もう休んで下されい(生玉)

「あとじようりともいひ、あとにし寄り」の訛語で、「たし」が「じ」に拘り、「より」が「ちようり」と延びたもの。後へ退る。あとつまり。

*あとじより いとしかばいと、言はしんした言の葉は嘘かいな、オオしんき、あとじよりさんすは早あき風か(女権)

「あとじより(後退)と同じ(前條を見よ)。「さんすは」せられます」の訛略された語である。「あとじよりさんすは」とされせられますの意。

*あとつけ 興作は荷物も跡附もそこそこになげおろし(舟波興作)

「後附道中馬にて乗客の後に附けた荷物。*あとづれ あとづれの子の花次郎(賀古教信(後述)後妻。*あと下し おれにも大きな太夫買うて下されと、あどなき言葉に腰元ども氣の毒がり(夕霧) 急な所に

取りまぜし、女郎はあどなきならはしなり(百日曾我)

「あどけなし」に同じ、その條を見よ。狂言記、こなくわいに「まてまても人間といふものはあどなき者や」

*あとへん ああ、これも跡へん、今言うて返らぬ事(生玉) 何言うてもあとへんでは返らぬ(天桐愚)

「足偏」跡の字は足偏なればいよ。跡、跡事。運歩色偏に、足へん

*あな 落中の今朝のあなかまと、心亂るるばかりなり(堀川波夜)

感動詞あ、「あなかま」はあ、かしまし、あ、かましまし。源氏物語、御法の巻に、「女房のあるかきり騒きまどふを、あなかま暫しとしごめ顔にて」

*あないち 糠袋はおれに下され、巾着にしてあないちのつぶ入れます(萬年草)

「穴」あなうち、穴打の訛であらう。意鏡のことで、小兒の遊戯である。地に線を畫し、錢を打つて勝負するもの、近代は錢を用ひなすで戲子を用ひた。

和漢三才圖會十七に、「意鏡。俗云穴伊知、穴擊之戲乎、……今傳兒多弄之、二人或三人錢出合、互更擊之、橫引筋於之地撒錢、一錢有榮、此名主、以之擊三敵所指錢、中則爲勝、如誤中他錢、則此名(倍留)爲負、初撒時誤出筋外、則(此名太禮留)爲負、一種地撒、大可笑、而視穴擲、入穴者爲自得、取之、穴外錢任敵、擊之中則爲勝、其餘如上云々、(日本紀事、十一月の條に、自是節兒童擲地爲小穴、各以錢

投穴、以其近穴爲一二次第、其後每二人、出錢或二錢或三錢、各集錢一手握之、則投三前一穴、遂然各指點所撒之内一文錢謂之、使之其錢、錢人擊之、其人以別錢一枚一擊之、其中所撒之錢、勝者爲勝、悉取納所擊投之錢、是稱穴、不中、錢者爲負、不能投、取之、則與稱穴、二之次人、又如此、是後京極攝政良經公傳記、所謂意鏡、而中華擊環之類也。

*あなうら 非道のあなうら大地をぶんざき(女護身) 文覺の頂上よりあなうら(無慮)

「あな」の條を見よ。

*あなはたつたりゆうわら (松風)

「阿那婆達多龍王」阿那婆達多是、梵語「アナパトワタ」阿那婆達多、阿那婆達、ことである。この地に棲息してゐる龍王の名で、八大龍王の「あのかだつち」をも見よ。

*あなじや 釋迦如來の御弟子阿難・迦葉(釋迦)

「阿難阿難陀(Ananda)の略で、釋尊十大弟子の、提婆の弟で釋尊の從弟である。釋尊五十五歳の時から二十餘年間侍者となりて、東西の化導に隨行し、多聞強記を以て知られたる人である。

*あにじやびと 兄じや人、弟死ぬにも死なれぬ口惜しやと(扇八景)

「兄者人」も「兄ぢや人」であるが、古くから「兄者人」兄ぢや人し書いてある。兄にてある人。兄上この語武士町人間に用ゐられてゐる。

あにぢやう 康頼様は兄ぢやう、俊寛様は父様と拜みたい(女護身)

「兄ぢやう」兄様。丈は丈人の丈で、年長者に對する尊稱である。周易師の卦の條に、「師、貞、丈人吉、无咎」とあつて、玉節註に「丈人、嚴莊之稱也。伊藤長胤の通解に、「丈人者老成之稱と見えてゐる。序云、劇毒や相撲場の前に立並べた花客から贈つた大帳に、「何某丈江」と書いたのが、この丈もこにふ丈である。

*あぬまい 只今かやうにせめ念佛にあふことも、出家の身にはあぬまいと、あぬまいあぬまい、アアぬまいだとぞ語りける女権)

「あるまい」を態と訛つた語で、「アアぬまいだ(アア南無阿彌陀の歌)の音に似せたのである。

*あねざと 嵐が雪をもつて北山、東山、西に姉里、戀廓(雪女)

「姉里」姉取とも書く。遊里、遊廓。

*あねぢやびと 彼の菅笠着て來る女房、鹽町の姉ぢや人、目の悪い角前髪は弟の幾松(生玉)

「姉者人」姉にてある人。姉上。「あにじやびと」をも見よ。

*あねぢやらう 朋輩といひ姉女郎、ほんの姉さん妹と姉妹の契約して、あれさん便りに勤めたに(生玉)

「姉女郎」姉分の女郎。姉として敬ぶ女郎。*あのかだつち つがひの龜のすむ水は、あのかだつちの流れと知れ(聖徳太子)

「阿婆達池」梵語アナパトワタ Anavadatta

【阿那婆塞多末阿那陀多末】で、無熱惱池、大清水池と譯し、勝部洲の中部にあたり、香山の南、大雪山の北にあつて、周匝八百里あるとぞ。この文は、大版の四天王寺に龜井水といふがあるので、かく書かれたのである。

***あのおくらさんみやくさんぼだい**
阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜、大とつれんの降魔の利劍(大經延)
【阿耨多羅三藐三菩提】梵語アヌツラサマツサム、ボム、J Anuttara-Samaks-Sambodhiの音寫で、無上正偏智と譯す。佛陀の智徳を讚美した一名號で、諸佛最上の妙道である。金剛經に無上正偏智の註に「無者無語折染、上者三異無能比、正者正見也、偏者一切智也、習者知一切有情皆有佛性、但能修行盡得成佛」。

***あのおくらさんみやくさんぼだい**
隨求陀羅尼の籠手を差し(女護島)
【あのおくらさんみやくさんぼだい】の略。その條を見よ。

あのおのもの おまんば中にうろろと、情なや疎まじや、あのおのものが暗しい(薩摩歌) あのおのものに夜がふける、口説はお床でお床でと、むりにお寝間へおしやれば(并簡) あのおのものゝ臺詞なし、ひつたりと抱付きて、一度手並を見せ給はば(釋迦)

***あはう** 周利槃特のあはうでも(女愁) あはう力の會我の五郎時致といふかつ(浪人)會稽山
【あはう】はかまの。おろか。愚人。

あはう 周利槃特のあはうでも(女愁) あはう力の會我の五郎時致といふかつ(浪人)會稽山
【あはう】はかまの。おろか。愚人。

【あはう】は阿傍羅刹(その條を見よ)と云ふ獄卒から起つた語であらう。阿傍は阿防・阿坊などと書いてあつて、五苦章句經なるに「鼻毛にてんばをつりし罪科は、あはうらせつめやうくらん」と見え、和訓栞に「あはう。俗に知人をかいくへるは法花遊林に、閻羅王の事に、百萬之衆諸阿傍是と見ゆ。或は阿防羅刹より事起りたるにや」と見えてゐる。阿房は始皇が阿房官を造りて國を亡せし故事であると云ふ謠事との説は、こつつけ説であらう。あはう力といふも度外なばか力を云ふので、阿傍羅刹の大力からいへられたであらう。「あはうらせつめ」を見よ。

***あはうばらひ** よい仕合で御改易、阿房拂か切腹か(夕霧)
【阿房拂】徳川時代に行はれた刑罰で、武士の腰に佩る兩刀を奪うて追放すること。傾城佛原に「いそぎ町人の見せしめに、刀を奪ひ取り阿房拂に致すべし」。

***あはうらせつ** 牛頭馬頭のあはうらせつ(孕常盤)
【阿傍羅刹】梵語 Avoraksas 阿傍は地獄で罪人を呵責する獄卒の名、羅刹は食人鬼と譯す。牛頭や馬頭で人と同じ手をなし、兩脚は牛蹄で、山を排する大力で、三股の鋼鐵叉を持ち、罪人數百千萬を一又で籠中に入れらう。

あはざのらからず 九軒阿波座のらら鳥、月夜はなほか闇の夜も、瓢箪町を腰付けに(淀鯉)
【阿波座のらら鳥】大阪新町の遊廓をぞめいて歩く者をいふ。阿波座は大阪新町遊廓内の町名である。新町遊廓の真中の筋を瓢箪町といひ、瓢箪町の北隣の筋を阿波座筋といふ。野らはなまけものをいふ。鳥は「かをかを」。

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

【あは】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

あはぬだぶつ 杉が袖から報謝の錢たつた一錢二錢で、三千里を隔てたる大明國への長旅は、あはぬだ佛(天網鳥)
【あはぬだぶつ】杉が袖から報謝の錢たつた一錢二錢で、三千里を隔てたる大明國への長旅は、あはぬだ佛(天網鳥)

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

あは 鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)
【阿は】は鏡に映る稚子は、浦島太郎が孫の子の曾孫の血筋愛らしく、……てうち・てうち・あはば(浦島)

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

***あひ** 扱(あひぢやの、サアそなたから錢せう(女補)
【扱】は「あひぢや」といふ。相仲間。同類。ぐる。和訓栞に「あひ。相をよめり、たすくるとよむより轉じて互に合ふの意なり」。

あのおくらさんみやくさんぼだい——あひおもひぐさ

れもまた、行方も知らぬあひ思草

〔會振崎〕

〔相思草〕煙草の異名。空に消えては云々を

見。「おもひき」をも見。

*あひき 綱引すとあごととのふる

網船の(三國志)

〔綱引〕網を引くこと。「あごと」も見よ。

*あひくち 見苦しいお侍、あひくち

一本ささぬ町人、手むかひは致さ

ぬ(大經師) されば先御懐胎とも申

されぬ、然らば御脈と合口ぬぎ、

採手をして(冷泉節)

〔合口〕鑿なくして、鑿口と柄の縁と合ふやう

に作つた短刀。「合口脱ぐ」とは、差いてある

合口を脱して置くので、そして服搏を診察し

たのである。序にいふが、合口を脱いだのは

その時の都合によつたので、診察するとき

は必ずしも合口を脱ぐのではないことは、人

倫訓蒙圖彙卷二に、醫師が刀を差ひ九條で病

人の脈搏を診察してゐる書などがあるので知

れる。醫師の風采につきては、新訂笑記(元祿

元年刊)卷三に「醫師も一年足らずして俄朝

りの天窓を振り、長羽織に小脇指、藥箱丁帯

合せ置き、暗中などで敵味方の區別つかぬ時

に、互に善合ふ詞。

あひさし 行司聲かけ、御相撲見え

た、勝負ない、あひさし・あひ投げ

とたんのわれ、勝負なしと引

分ければ(弁箇)

〔相撲〕相撲の手の名。互に敵の脇へ手を差込

むこと。

*あひしやう お爲を思ふ新七がさ

ほどお氣に入らぬば、水と火との

相性が、あまりといへば曲がない

(淀鯉) 相性よしの水と金(賀古教信)

〔相性〕人の生れた年の干支の五行(木火土金

水)を其人の生れた年とし、木は火を生じ、

火は土を生じ、土は金を生じ、金は木を生じ

し、これを相生といひ、木は土に克つと

してこれを相克といふ。相生、相克の關係によ

つて、男女主従朋友などの間柄の吉凶を占

む。水と火は相克なるによつて凶である。

三、世相小鏡に、「男水・女金、大きによし、

子七人あり、福福の多し、歌に、この世に

神を祭りてよし、簀旗多し、歌に、この世に

てかかるたのしくめでたきよ、昔の神の舞

門にかかると答(危鯉)

〔相搦〕諸共と搦撫なする惡漢仲間。「す

り」は摩で、人の物を摩り掠めるよりいふ。

*あひたてなし 子を寵愛のあひた

てなく(鐘權三)

分別ない。わけない。豈草に「俗に恩愛の

心なきを愛立なし」と云」とあれど、間斷無し

の義であらう。あひたてなしは「あひたなし

」の轉。

あひづらふそく 與兵衛せくな、女

郎と詰閉いて男立てい、會津蠟燭

が光りだしたら、此方二人が心

切つて踏消してくれる(女殺)

〔會津蠟燭〕指りあつて會津地方から出る蠟燭で、

花燭など描いてあつて會津の物である。

この文は、會津客を會津蠟燭と嘲弄したの

である。孫州府志・土産門下、服器部に「蠟

燭。凡蠟燭自製後。來者爲上。服色潔白而燭

光明。陸奥會津。越前福井次之。

*あひてだい 惣兵衛といふ相手代、

若い且那の氣をつめさせ(淀鯉)

〔相手代〕同じ商家の主人に仕へてゐる手代。

夫から妻のことをいふこともある。

*あひのやま(夕霧)(反魂香)(三世相(生玉)

〔問の山〕問の山節の略で、人生の無常をうた

うた俗曲である。寛文・延寶頃、伊勢國尾上

坂及び浦田坂の問の山で、影を摩り三味線を

弾いて、問の山を唄ひ、往來の人から錢など

を貰ふ袖乞の一種の者があつた。京阪地方にも

に胡弓を用ひたのがあつた。生玉中・下之巻

に「萬歳があいもきやうある問の山」とあつ

たのである。神都名勝誌・四に「問の山節。

往古僧行基の兩宮に奉詣せし時、世人に無常

を示さんとて唱歌を綴り、比丘尼に無常

はせしが初なり、寛文・延寶の頃に、兩問

山の路傍に小屋を作り、女は紗笠箱を織ひ、

三味線を弾き、男は編笠を被り歌をして、子兒

を誂らせ錢を乞ひき、其風ふ歌いと哀れにし

て、文句も能く聞分けられたるよし。井原

西鶴撰の日本永代蔵卷四、仕合せの種を詩錢

の條に「相の山袖乞までも心がなく、道者の

機嫌を取りて錢を乞ふ者、身に絹布をか

ざり、連れ引きの三味線に乗せてあさましや

心一つといふ一節、いつ聞きてあさましや

間一の山歌詞は一様でないが、その本調子の

陀くくく」。異林子作中に見えるのは夕暮替へられてはあれども、二三を記せば、夕霧阿波鳴渡に「ゆふべあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と擧げども、聞いて驚く人もなし、野邊より彼方の友とは、血脈一つに逐敵一見ん、これが冥土の友となる。傾城反魂香に、これがあるのもこれと同じである。生玉心中に「花は散りても根にかへる、人は歸らぬ死出の山」。三世相に「ゆふべあしたの薄霧も、消えてかへらぬ死出の山」など見えてゐる。間の山は物哀れな節であるので、長う流しせずには残つたのである。今も浮瑠璃に間の山の音節があるは、この手の残つてゐるのである。「おさき」をも見よ。



〔嵐曲編 (天和元年刊)所載〕

あひやけ 梶田治部右衛門は、あひ

やけの舞を思ふも娘の爲(露門松)

〔相親家評と嫁の雙方の舅同士の稱。倭字通例書に「あひやけ。相舅」

あひよみ 人を害ふ工面とは鏡に

あひやけ——あふさかのゆふつけどり

かけて知つたれど、相よみなければ是非もなし(歌念佛)

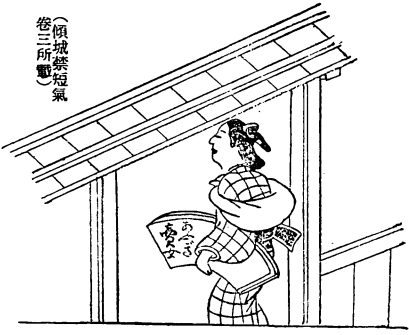
あふぎいか 吹かぬ風もつ扉いか(水明日)

あふぎうり 煙管・團扇・煙草入、役者評判・扇賣(今宮)

〔扇賣〕扇を入れたのを幾つも重ね持つて賣り歩いたもので、正徳頃最も多かつた。



〔天和長久四季あそび(天和頃刊)所載〕



〔傾城禁短氣(卷三所載)〕

あふぎぐるま 唐團扇・扇車・水車、油煙につれてくるくる廻燈籠(龜山)

あふぎながし 扇流の瀧つ波、たぎつて落つる水の綾錦渦巻く如く(本領曾我)

〔扇流〕昔時大塚川で遊興に扇を流したことをいふ。黒川道祐撰、雍州府志九古蹟門下(高野郡)に「扇流。在大井川、中古高麗遊覽時、淨金銀扇於斯川、而遺興、倭俗以三金銀酒節、扇流」。

扇の影 因果の車めぐり来て、遊女の身とは生れしぞ、親里を振りすて扇のかげに宮仕へ。左手も他人右手も他人(三世相) 扇のかげや庭寶、妹女郎朋輩衆、唐の鏡を鴛鴦の、相の枕に渡してたべ(三世相)

破れ車でわが悪いとはいひひながら、扇の蔭の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子ぢやないかいの(卯月紅葉)

〔立烏帽子〕口唇にいふ語である。己が御蔭に預り主人として立仰ぐ者をいふ。「扇のかげ」とは、御蔭に預る者をいひ、「立烏帽子」とは立仰ぐ意にいらたので、立仰ぐといふ立に、立烏帽子といふ烏帽子があるのでそれをかけたままで、烏帽子に何の意味があるのではな

い。卯月調色に「出船は遠く、入船の親しうなるは世の習、烏帽子賣の親仁様」とある烏帽子も單に附添へたまで、あつて、粹巫女が物々しげに言ふ言方であらう。三世相にある

〔扇の蔭は、扇屋の庇蔭をきかせたのである。〕

扇の女 今我名をつつみても、何か其かひなつ果つる、扇の女の物狂ひ(歌念佛)

あふぎふる わしがまへかた扇風呂にゐた時からの近付ゆゑ(生玉)

〔扇風呂〕湯女風呂屋の屋號。「風呂屋の條をも見よ。」

道するべ(延寶六年刊に、天滿五丁目・扇風呂五郎右衛門、湯女三人)と見え、元祿曾我(元祿十四年刊)巻三に「扇風呂の萩、みなど今の近を取寄せけるに、……扇風呂の萩の上風はつとほめかす空燒、あけぼの模様地白に茶編子のしごき帯、排羅縷の内衣云々と見えてゐる、この扇風呂のことであらう。湯女袂の衣装を見ても立派であるやうに、おさがが連懐にある如く、彼女が扇風呂の湯女として全盛を張つた當時は、伏見坂町あたりの遊女よりの勢力があつたことが知れる。

あふぎをり 御影堂の扇なり、ほれ身を碎き稼げども百日曾我

〔扇折〕扇を作ること、又その人。「みえいた」をも見よ。

あふこ 杵おつ取り振上ぐれば(女殺)

〔初〕物を懸けて荷ふ稱。てんびんぼう。和訓栞に「栲木の戯にや、今の俗おごといへり、……野人てんびん稱ともなり。』

***あふち** お吉を迎ひに冥途の夜風、

はためく門の幟の音、あふちに賣場の火も消えて(女殺) 蚊帳打上るあふち風(薩摩歌) 火炎は却つて葉隠れたる敵の上に燃掛り、一騎も通れぬあふち死(日本武勇)

〔備〕あふちかぜ(煽風) 吹巻くる風。あふち死とは、風にあふられた火炎で燃死すること。

***あふなもの** いひすてて歸るそそ

くさ坊主、未來頼むばあふなもの(宿屋申) 心々變る時は兄弟ながら敵對なり、同道はあふなもの(特統天皇)

〔危いもの〕の略。あふなものは、時に遇ふに近江をかけたのである。近江とは初代竹田出雲の後名、是時五十七歳。用明天皇職人鑑の上演は、外題年鑑に寶永二年三月とあれども、標年代記に寶永二年十一月とるに従ふべきである。この時竹本流後様は病氣の故を以て隠隠してゐたので、竹田出雲代つて座元(時に十五歳)となる。近江は子の出雲清定の後見にて初上演故、近松が近江父子の將來を祝した詞である。「いぬのかほみせ」をも見よ。

あふみ 時にあふみや世に出雲(用明天皇)

〔酒見事杯の(懸物挿) 江戸のあふみが繼棒で、朝

あふみ 江戸のあふみが繼棒で、朝

酒見事杯の(懸物挿) 江戸のあふみが繼棒で、朝

***あぶらぐち** とろりとどます油口

(聖徳太子) 底意の悪を座興になし、

言ひすべらする油口(浦島)

〔油口〕油のやうに口溜りのよい義。しぶらすに能くしゃべる口。
あぶらぐち お供の奴の髭にぬる油墨などのお尋ねもあるべきに(反魂香)

〔油墨〕油をまぜた墨汁。

***あぶらつば** 油壺から出す様な男、

しんとんとろりと見惚れる男(鏡裡三)

〔油壺〕油を揚げた罎。油壺は狐の好物であるが故に、狐を釣る餌に用ひる。

***あぶらのちごく** お吉が身をさく

劍の山、目前油の地獄の苦(女殺)

***あぶり** 馬の皆具には泥のかゝるもの故に、あぶりといふ字は泥をへだつと書く(女殺) 渡邊があぶらずりをしつかと抱く(關八州)

〔泥屋〕泥屋とも書く。馬の腸腹を覆ひ、泥の跳上るを防ぐもの、毛皮又は革で製す。和

人名部九平次を見よ。

名抄に「阿布利、數節也。貞文雜記に「泥障は、もとは雨天に衣服にはぬれく泥を障る爲のものなり、後には晴天にもこれをさして節とするなり、武用にはいらぬもの故、軍陣騎射などに用ひる事はなし」と「あぶらずり」とは、泥障が證に擦れる所をいふ。

あぶりこ てつきう・あぶりこ・鐵火(策) 永朝日

〔我子〕餅などを焼く用ひる鐵の網又は襖。

***あぶりやうし** 我々はこの國の押領使横山殿の御内者(小栗判官) 必定村上が領分へ馬を入れ、信濃一國押領の威勢をあらはす爲な(川中島)

***あふる** 島につかふ野飼の馬、うてどもあふれども、飼はれば瘦せて足立たず(女楠) 前脚がいて高嘶き、打てどもあふれども、尻込みしてはばけ廻る持統天皇、東國の馬は鞍そばえ、躍上つて高嘶き、あふつ打つ十四五間(日本武勇)

〔獨馬を進まされる爲、馬上で雨笠を動かして馬腹を踏立てるをいふ。「あふつ」とはあふりつもの略。]

あふれつはもの 頼義を御宿し、御馳走の體にて討取らんと、あふれつはもの七百騎隠し置きて待つと(ころに)(文武五人男)

〔盜兵〕手にあまるつはもの義。荒武者。背きしは、敵のあふれ者か、但盜

賊か(女楠) 前代未聞のあふれ者、擄取つて此處の探題へ引けや(西王母)

〔盜者〕手にもあまるあまし者。無法者。無頼漢。狭衣四の中に、「今はさやうなるあふれもの、いでくまじげなる世にこそと、打ちさざめくもありけり」

あへかこ 「へかこ」「しんすけ」を見よ。

***あへなし** 扱は我ゆゑ自らゆゑと、あへなき首の髪をなで、聲も惜まず泣き給ふ(弁筒) あへなき聲にて、目には見ゆれど形はなく(天神記) 父長兵衛は一人子を敢なくなせしその悔み(卯月調色)

〔敢無〕詮ない。はりあひない。〔敢無く〕とは、はかなく。死なす。

***あへのせいめい** 頼光の代官として渡邊の綱 安倍の晴明を誘引し(酒吞童子)

〔安倍晴明〕花山天皇時代の人、算數天文卜筮に熟達し、陰陽學の大家である。花山天皇が帝位をおり給はれたことを天文に於て知り、また古淨瑠璃信田孫に、安倍保名が狐の命を助けた恩返しに、その狐が或は僧となり、或は美女にばけて保名を保護し、保名と契つて安倍童子(晴明)を産みて、葛の葉の子別れとなることなどは、人のよく知るところである。

あほのおんかみ 出雲の國におぼします阿善の御神、これを救ひ止めんと(倉橋山)

〔阿善御神〕播磨和歌集卷一、中大元三山歌の仙覺詩に「播磨風土記云、出雲國阿善大明神、聞大和國吹火香山耳梨三山相聞、以此歌誦山上來之時、到於此處乃聞三制止、覆其所

聞大和國吹火香山耳梨三山相聞、以此歌誦山上來之時、到於此處乃聞三制止、覆其所

に乗之船而坐之、故號「神集之形覆」に見えても。

あまかあさんごじゆ 御物蒔繪の印籠・あまかわ珊瑚珠はさもなくして

(反魂香)
〔阿媽港珊瑚珠〕阿媽港から渡來した珊瑚珠。阿媽港は即ち支那の澳門である。長崎参眼録(元禄十七年刊)下巻、日本渡海御停止國圖の條に、「阿媽港」とありて「あまかわ」と傍訓してある。(澳門は「アウモン」の音である。土人阿媽港と呼べるを、葡人聞へて「マカラ」とらうた。蓋し阿媽港の名は、此半島にアマと稱する一神祠があつたより起つたもので、マノ瀬戸(e detroit d'Amia)の意だとすふ。現今もなほバラ塔下の神として祀られてゐる)。

あまきる 天きる雪はばうばうばうばう、寒氣しきりにさつさつと

(雪女) 深草山あまきる雪に雲暗く、まだ朝あけの心地して(烏帽子折)
〔天霧〕天の曇りあふをいふ。「あまきる」は奈良時代に多く見える語で「あまきらし」「あまきらふ」などともいうてある。

あまくに 將軍様の御重代、天國・小鍛冶・義光、其外名に負ふ銘の物(雪女)

〔天國〕天國作の刀。天國は大寶嶺の刀匠で、大和國宇多郡に住し、平家少實刀小鳥丸を作つた人である。
〔天の下〕下巻、平治物語に「あまかきる」

あまざかさま あまざかさまの事

にても、主に踏まれて恨みはない

(逆鏡)
〔天逆様〕眞逆様 平治物語に「あまかきる」

ま逆さまの仰せなりとも、違ふまじとこそ存ずれども。

あまざさか 雲井をここにあまざさか

か、九州二島の浦浦まで(日本武尊)
〔天難〕遷り遷り離れる。「さか」は離れる意を示す。「さく」といふ語に對する自動詞である。根林千作の心中二枚絵草紙に「あまざさか」としてあるのは、正しくは「あまざさかり」または「あまざさか」すべきである。

あまぢや 昔より宇治茶・近江茶、又ば唐茶、甘茶などといへど(大鏡)

〔甘茶〕土常山又は絞、煎、煎、煎を蒸し、揉みて緑汁を去り、これを乾したものを湯に入れて煎じたまふ。

あまつかとり 天津かどりの妙色衣

御腰に纏はれて(釋迦)
〔天津〕美しい縫紉。縫は、固縫の義。目を細く回く纏つた絹布。

あまつかなぎ 晴明右近に近付き、りつつかうりていの祕文を唱へ、

天津金木・天津すがそなちくらの

沖戸におきたらばして(酒吞童子)
〔あまづつかのき〕天津握の木の略稱。「つかのき」とは小木の枝。大福調後釋に「天津」はその本天つ神事なれば尋みていへり、「天津」は……魂之本といふかたなり、大きならで手に取るばかりなる木のよしなり。

あまつすがそ あまつかなぎ・あまつすがそ(酒吞童子)

〔天津菅簾〕よき菅簾をいひ、秋の時神に供するもの。延喜式・卷八・大政詞に「大中臣天津金木手木打切手斷比千座藤原藤原足波志天津菅簾手木断末前切氏」。

あまつふとのつと 神鏡抱き奉り頭に

に捧げ、口には天津太祝詞、悪女が眉間に差向け差當て(振袖始)

〔天津太祝詞〕いかせし祝詞。「あま」は美稱。神事なれば尋みていふ「あま」は助詞。「ふ」とは「かみしり儀」「のつと」は祝詞で、神に告申し詞。

あまつふり あまつふりがさつふき

には、いまだだだ、しんだだだ

あと、おとひやつてたもり申す(加賀守降)

雨つ降り、即ち雨の降る意。こ、又は、雨の降り風の吹く時には、生存してあるかなあ、死んだかなあ、とお尋ね下さつて給はりたりの意。

あまのいはくすぶね 天の石樟葦分け、手ぐりぐりぐりぐり船に乗

せ奉り(烏帽子折) 三歳足立ち給はれば天のいはくす釣船の、下すや釣の絲櫻(賀古教)

〔天霧籠船〕藤原で造つた船。「天」は美稱。「いはく」は堅平の義。伊弉諾尊、その御子の蛭兒三歳立給はれば、天の磐梯船に乗せて放ち給はれたといふ。神代紀上に「次生三蛭兒、雖曰三歳、脚連不立、故載之於天霧籠船、而順風放棄」。

あまのいはくら 尊怒りの御聲高く、天のいはくらにして天照神、

吾が孫子は瑞穂の國の君たるべし(日本武尊)

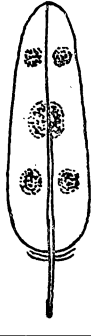
〔天聲〕天は美稱、神事なれば尋みていふ。「いは」は尊の義。「くらは」は御座所。神代紀に、「皇孫乃離天聲座」。

あまのうきはし 天の浮橋(つ)の間に、我が爲辛き途絶して(振袖始)

〔天津橋〕古事記傳に「天の浮橋は、天と地との間を神たちの昇降り通ひ給ふ道にかゝれる故に、浮橋とはいふならん」。

あまのおもて 朝比奈は御籠、あまの面に節遠き、塗籠のひられば二十四立(五人先)

〔安藤面〕安藤の舞の時に、顔面にあつて紙に文がある、それのやうに文ある羽をあまのおもての羽といひ、この羽ではいだ矢を、あまの面ではいだ矢といふ。



あまのかごゆみ 悉くも天照大神、天のかご弓・羽羽矢を以て悪神をしづめおはします(抱負)

〔天鹿弓〕天の香山の鹿木で作つた弓で、香と鹿兒と訓が同じ、故にいふとぞ。また一説に、鹿を射る弓といふを、誤つて鹿兒としたのだといふ。日本書紀神代下に「高皇產靈尊賜天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢以遣之」。

釋曰、故謂之天鹿兒弓也、此矢弓具體如何答具義未詳、但或説云、採香山之鹿木造弓、故謂之天鹿兒弓也、採天香山之鹿木爲之、故命曰鹿兒、與香字、其訓同矣、一説射鹿之弓也、誤分作鹿兒也。

あまのさかてをう 夜半の鐘の物すき、心にくらへる願事、あまのさかてをうつてうけ(つ)へ(蠶女)

手を、後にはまはして叩つて、人を呪するわざである。宵火出見傳が兄の火照命の釣道具を借りて釣をされ、釣針を失はれたのを、兄の命になんでも釣針を返せと責めら

れて、困られてゐたところを海神の教によつて尋ね得、饅々の児ども言ひつけて、後手で釣針を兄に投げ與へられた故事（詳しくは日記を見よ）によつて、人を児ふに手を後方にやつて拍くことを、あまのさかてを拍つといふ。伊勢物語に「かの男はあまの逆手を拍ちてなんのろひをなるる」「さかてをうつを見よ。

あまのじやこー 折がな折がな、さあここちやと思へば傍にきつとあまのじやこ、面倒な、あまのじやこのない時節を（聖徳太子）人の妨げをする邪思な者をいふ。「あまのじやこには「あまじやく」といひ、「あまのさぐめ」（天探女）の「め」を略して轉訛した語である。多聞天が踏縮めてゐる鬼女形の者をあまのじやこといふ。天探女から来た名であつて、正し道に立つ多聞天の威力を示す爲に作られたものである。釋語に「神代紀に、天探女、此云阿麻能左惠謎」とあるを、口決に、天探女從神謀女也といひ、又一説に、探女探心、多聞天也といへる……今の世の言にも、さかてをさして天之邪古、また天之自夜久などもいへり」櫻陰廣談に「羅山子説、多聞天王所踏三鬼、名耐兼、或有與據、我無所檢」

あまのたくみ 泊瀬の皇子即位あり、雄略天皇と申し奉り、天のたくみを享けつぎ（浦島）
〔天工〕庶官治める所の事、もとこれ上天の工事である。人君天に代つて治めること尙書卑陽謫に「天工人其代之」

天の戸の明く 思出づれなつかしや、君に逢ふ夜は天の戸の、あくるを恨み語らひし（井筒）
天照大神 素戔嗚尊の暴辰を慎り給ひ、天の岩

屋に入つて出で給はれぬ爲に、天地暗くなつた。それで群臣愁ひ迷うて大神出迎の策を講じた。天の石屋戸の前で歌ひ舞ふ。大力怪神も、石戸を開いてこれを窺ひ給ふ時、手刀男み強いて引出し申した。そこで世が明くなつたといふ。故事を用ひて、夜の明けるのにいらたのである。

あまのとぶくろ 大黒舞と囃されて、天のとぶくろだんぶくろ、くわつと開けた初日の色重女
〔天の戸袋〕天の石屋戸の變の故事（前條を見よ）を用ひて、舞と囃された天の戸にいひなし、雨戸を入れる所を戸袋と云ふから、戸袋大黒天の額ふ袋をかきかせ、袋の縁からつけといひ、群臣また光明を仰ぐことを得た縁から、初日の色といひつづけたのである。

あまのはきり
あまのはへきり 荒神の天蠅斬拔きそばめ（振袖絶） 蘆原大日本神代三振の寶劍あり、一つは天のはきりとも、または十握の劍とも申し（枕草）
〔天蠅斬〕「あまのは、きり」とも、あまのはきりともいふ。素戔嗚尊が八岐大蛇を斬り給はれたといふ古の寶劍の名。日本書紀神代上に「素戔嗚尊乃以天蠅斬之劍、斬彼大蛇時、斬蛇尾而及、即墜而視之」、尾中有二神劍。武家名目抄、刀劍部に「蠅の和名波閉なるゆゑ、たゞ字訓を假て蠅の字を用ひしなり、古語拾遺に、天羽々斬、古語天調三之羽々、言斬蛇也とあるによれば、波閉も大蛇のことにぞあるべき、このものおのが身を引はへ行ないはせ、波閉といひしを、轉りて羽々といひしにやあらん。

あまのふちごま 足下にしつかと踏

へしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力國性懸、素戔嗚尊御身の長八尺……天斑駒白泡嚙ませゆらりと召せば、馬の背も撓むばかりの御骨柄（振袖絶）
〔天斑駒〕神代に素戔嗚尊、天の斑駒を逆刺された。古事記に「天照大神神坐思、殿屋、而令織神御衣之時、穿其殿屋之頂逆刺天斑馬駒、而所墮入時、天衣織女見驚而於檢衝隙上而死。

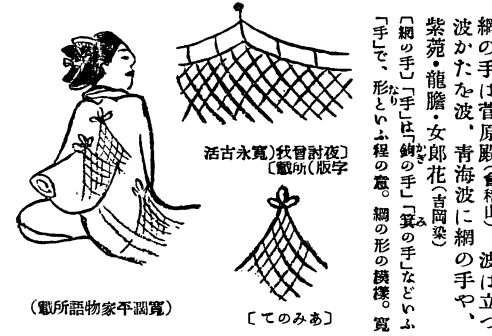
海人の戀 海人の戀とは大織冠、行平も、磯にみるめの汐馴衣（女護身）
大織冠は海人と戀仲であつたことは謡曲・海人無舞の本にも見え、巢林子の大織冠の中にも作り込まれ、在原行平が海人と戀仲となつたことは謡曲・松風に見え、巢林子の松風村雨束帯盤の中にも作り込まれてゐる。

あまもの 御臺所の御身さへ、こぼれかゝれる當り月、清瀧が懐にはやめ薬やあま物や（女夫也）
〔甘物〕甘物を煎じた汁で、嬰兒に飲ますもの。若風俗に「すり粉あまものにて人間育てるためし數多あり」女理實記に「子生れおつるとそのま、甘草一匁、速速二分粉にして振出し綿にたし飲まむとて、五香湯もよし」

あまもよひ かくままで近き雨もよひ、月も暈召す朧かけ（十二段）
〔雨借〕雨の將に降出さうとする様子。雨借様。網島の心中、網島の心中もござんする、徒然平家物語、なう父様何の本がよからうぞ（菅原甲）
〔紙屋治兵衛、紀の國屋小春〕心中天網島巢林子作の院本である。院本は人名部を見よ。

脚）阿彌陀の四十八、割碎きて釜の下（盃合戦） 町方にははやるあみだの光といふ事して（女腹切）
梵語 Amida、阿彌陀佛「阿彌陀空」とは、梵頂にすらして被つた笠。嬉遊笑覽二、器用部に「あみだ笠は笠の名にはあらず、笠を仰いで後方（者）たるが佛の後光く故にいひ」
〔阿彌陀の四十八〕とは、阿彌陀の靈圖四十八（四十八枚御札の圖）を見よ。を四十八に割碎く事にいひかけたのである。「阿彌陀の光」とは、御鉢集のやうな後光ある阿彌陀を畫き、其後光の各端に金額の多寡を記した延紙を引裂いて採擷し、各人其額に當つた金額を出しあひ佛堂の籠に擲つた者が物を買ひに行くことが中巻の本文に見えてゐる。

あみのて いたら貝は岩永黨、網の手は須貝黨、大洲ながしは安田の三郎（五人兄弟） いたら貝は岩崎様、網の手は菅原殿（釋出） 波は立つ波かたを波、青海波に網の手や、紫菀・龍膽、女郎花（吉岡染）
〔網の手〕「手は」貝の手「箕の手」ならん「手」で、形といふ程の意、網の形の模様、寛



（電所語物家平調覽） [てのみあ]

調平家物語(寶永七年刊)巻五に「和泉木綿を
はな色に、しろき網の手のちらし形云々」と
ありて、この挿繪が入つてゐる。夜羽骨杖寛
永古活字版に「あみの手はさがいたう」とあ
りて、この紋繪が載せてある。

***あめらし** ちのあめ牛に牛の魂
が出るとして(薩天皇)

***あめだらし** れつそりの牛盗人、ち
よろい工のあめだ牛(關八州)

***あめらし** (黄牛)を「あめだらし」とも毛色に
よつていふのである。丹生山田青海綿繪並刊
本)の序文に「數島のうららかな源氏物語
巻々のいや高きに、山田の長がつかひこみし
あめだ牛にすまかへし上げし大授云々」大内
裏大友真鳥第四に「ヤイ助八、此春のあめだ
牛ゆぶから何程で買つた」

***あめのあし** 死に後れじとたどれ
ども、子供の足に(雨の脚)(黄古教僧)

***あめのあし** 雨が地面に落ちて散る状、脚あつて
飛んでゐるやうに見えるによつて云ふ。雨。
この語古くから用ゐられ、源氏物語夕顔の巻
に「内よりの御使、雨の脚よりもげにしげし」
彌始日記に「雨の脚いとのどかにてあはれな
り」など見えてゐる。

***あめのかごゆみ**

***あめのしたの御覽**

***あめのふちごま**

***あめのふちごま** 「百姫」と書きて云々を見よ。

***あめのふちごま** 「五五のふちごま」を見よ。

***あめのふちごま** 天の御門 天の御門の御願野よ(彈丸)

***あめやさめ** 涙は車軸雨やさめ(井
筒)

「雨やさめ」「さめ」といふも雨のことである。
小雨を「さめ」といふ。春雨を「はらさめ」といふ類
の「さめ」である。「雨やさめ」とは雨の連
「さめ」で、甚しく流弊するに喩ふ。桂川蓬蓮
柵(淨瑠璃)帯屋の段に「相起して顔つくづく
見る目もあかぬ雨やさめ、長右衛門もこの
見の別れ」。

***あも** このあもは正月の、在所へや
らうと思へども(歌念佛) 今宵はお
寝間てしつぱりと、お二人のあも
つき(關八州)

「あも」ともいひ、甘の糰、餅をいふ。和
義菜に「あも、兒女子の語に餅をいふ。甘き
調菜に「浪花方言に、餅をいふ。江戸
でいふあもん。「あもつき」は餅搗で、房事に
いひなしたのである。魂體色遊園男、大臣紋
日をくぐり沈の條に「これから餅搗く一段ち
や」とあるのも、男女交接の意。

***あもふもと** さりながらあもふも
もとも御存じなく、夫婦とは誠し
からず(天鼓) 跡な奴が國處、あも
とふもとの赤松を、打割り松の油
煙(薩摩藩)

足元踏元の義。身許。俚言葉彙に「あもふも
もともしれぬといふ俗語あり、おぼつかなき
心なるべし」。薩摩歌のこの文は、恰も地名
のやうにもあもふもにきかせ、薩の縁で赤松と
いひつゞけたのである。

***あやかちりめ** 果報者め金持め、あ
やかちりめと騒ぎける(飛騨) 與次
兵衛殿はあやかちりめの(鷹門松)

似てありたいもの。「あやは、あえもの」な
どいふ。「あえ」と同じもので、「あゆ(省)の轉
説語である。勿體なくも此寺に、血をあ

***あやす** 勿體なくも此寺に、血をあ

やす奇怪さよ(田世廣)

血または汗などを流す。したよりもらす。
「あやすは、つめてあゆし」とも云ふ。うつぼ
物語に「九だまの血をさしあやして」。古事
談に「血あゆむ」。

***あやすげがき** 横笛はあやすげ笠
にて(顔隠し)

横笛をいふ。横笛を編んで作つた笠であつて、
笠笠の上には後三年合戦給巻には、この笠を
烏帽子の上に被つてゐるがある。田樂法師
や山伏も被つた。貞天雜記に「今の編笠也、
但今の編笠は深し、あやむ笠は深からず、一
名ひでり笠ともいふ。修驗抄に「修驗所具
班、蓋者、佛界種種天蓋、慈悲覆護形相也、
凡天蓋者、一切衆生悲母胎内、戴三衣衣
表也、其形圓者、表五位圓滿之相、圓形金
界月輪也、白綾表之八葉胎藏也云々」。謠曲
拾遺抄巻十二、安宅の「あや菅笠にて顔をか
くし」の註に「菅の笠に非ず、修驗抄に班蓋
と書て、あやいがさともいふ」。

***あやつり** 操の御評判とぞなり
ける(堀川渡)

「操」操人形を淨瑠璃に合せて演じる操芝居の
略。

***あやは** 狛の伶人舞樂を奏し、くれ
ばあやはの二人の織姫きたりんり
んす(抱符)

「あやはどり」(演繹)の略。漢國から来た織工
を演繹と云ひ、吳國から来た織工を吳繹
と云ふ。日本書紀に、應神天皇三十七年春二
月、阿知使主をして織工を求めしめた、四
十一年二月に演繹吳繹等を得て歸つた、また
雄略天皇十四年正月、身狭村主青、檜隈民博
徳等を吳に遣はし、手末、才伎、演繹、吳繹
及び衣繹の兒孫、弟姪等を率ゐて歸つたこと
が見えてゐる。本居宣長は演繹は吳繹で、即

ち一つものだといつてゐる。

***あやふにち** 何の科なきそなたま
で、あれ不義者とあやふ日、終に
命のほろぶ日(大經師)

「危日」古語中の語。大難書寛永十一年刊に、
「あやふむとは、危厄の日なり、萬事不用」こ
の文は、身を危くするを危日にかけたので
ある。

***あやむ** 人をあやめし科によつて
(歌念佛) 人をあやめ法を背いた科
人が博多)

「あやぶ(危)の義。む」といふと通じたので、
「かぶる(被)を」かむると云ふ類である。危
害を加へる。殺す。

***あやめ** 待つにつれなき時鳥、人
やあやめの親の内、奥を遙に見入
るとして(鹿が恩) 親子兄弟菖蒲の盃す
るとして、今日の節句は嘉平次の顔
が見えぬと(生玉) 今日菖蒲の節
句にも(生玉) 澤邊の眞菖かきつは
た、菖蒲は軒の祝ひ草(扇八景)

「菖蒲」菖蒲は悪氣を除くとして五月五日(端午)
の節句の祝草として用ゐる。菖蒲は軒端に
挿しつけたので、「あやめの門」菖蒲は軒の祝
ひ草」ともいひ、端午の酒宴には、菖蒲を細
く刻んで酒に入れた菖蒲酒を用ゐる。刑徒談
時記に、菖蒲酒は瘧疫を辟くといえてゐる。
菖蒲の節句とは端午「五月五日」の節句をい
ふ。

***あやめぐさ** 愛ひ憂詞のあやめ草、
露の音し御身と我が、積る涙の
雫かや(重井筒)

「菖蒲草」歌舞伎役者芳澤菖蒲に菖蒲草をいひ
かけて、あやめ草におく露とつゞけたのであ

る。芳澤菫浦に就いては名人伝録に「若藤其の子、始め色子なりしが、歌舞伎へ出て若菜形より立役となり、後若女形となる、元禄十六年には女形の巻頭、正徳六年には三ヶ津總藝頭、享保二年には古今無類と評判記に記載せり、自姓を藤屋權七、享保十四年七月十五日歿、歳五十七、七つの老居をも見よ。

あよぶ 隣が町の會所、サアサアあふびやとわめけども(博多)

「あゆむ(歩)に同じ。和訓栞、「あこの條には「宇治拾遺に鬼はあよびかへりぬと見えたるはあゆみとかよふなるべし」。

あらうなは すがれば離れ、寄ればのき、振にかゝるあらう細、練れまつられしどるなる(女夫池)

「荒鷄」馴れぬ鶴を使ふ。明日對面と、荒海の障子押明けて奥に入れ(酒呑童子枕言葉)

「荒海障子」中が清涼殿弘福の北にあつた障子で、表裏共に繪があつて、表に面して右方に荒鷄の窟下の障上に蓬髪(ぼうみ)の男舞踏して、長い左手は魚を掴み、長い右手は海中に入れて居り、左方には海中の殿上に蓬髪の足長き男が、長い左手を伸べた蓬髪の男を肩車して起立せるを描いてあり、また裏に面して右方に、細代木の上にある川の中の假屋に男一人坐し、左方に水の上に架せる橋が描いてある。禁秘抄に「弘福板九枚北有荒海障子、南方手長足長、北面障子、宇治綱代繩繪也。古今著聞集に載の戸の前なる布障子を荒海の障子と名づけて、手長足長など書きたり、その北裏は宇治の綱代をかける。枕草紙に「清涼殿の丑寅の隅の北の隅なる細障子は、荒海のかたき生きたる物どもの恐ろしげなる手長足長などをぞ書かれたる」と見えてある。畧林子のこゝの文は、謡曲「大江山」に鬼の間に入り、荒海の

障子押明けて、夜小臥處に入りけり」とあるに據つたもので、手長足長の恐ろしげなるさまが、鬼の部屋に似合はしければかきうたのである。

あらがねの 引いつ留つゝ人力魔方、暫し勝負はあらがねの、土を離れて引上げしは、釣瓶を釣つた如くなり(無袖始) なほも動かぬあらがねの、命輪際より生抜きし大盤石の如くなり(五人兄弟)

「租金の」は土中にあるものなれば、あらがねの土とつづけて、土の沈つとすゝあらがねの金輪際とは大地の底のはてをいふが、俱舎論十一に「安立器世間、風輪最居下、其量廣無數厚十六落又落又は數量の名」、次上水輪深十億二萬、下八落又水、餘羅結縛金、……於金輪上有九大山、妙高山王(須彌山のこと)處中而住」。

あらかん *あらかん 六神通の阿羅漢(あらかん)を見よ。

あらけなし あらけなき聲々にて、サアアより追放す(旋盤) はやばや言はれぬ腹立ちやと、あらけなく咎められ(脚陣八島)

「あらけは荒氣(あらかん)なしは「はたなし」いならしなどの「荒し」と同じもので、意を強める語助である。荒々し。

あらし 西に嵐の吹き舞れて、空はさえても我々は、戀慕の間に暗がり(に)重井筒) 三代續く奴風、嵐が振を譬ふれば、其の江戸堀を思出す(今意) この間がよからうと、脇指抜いて切破る、音も嵐の三右衛門、替りん、と打つ太鼓に、隠れ

て餘所に「は知れざりけり(卯月紅葉) (嵐道頓堀歌舞伎芝居嵐座の嵐三右衛門をいふ。六方(江戸)舟屋を家藝としてあたらしく三代續く奴風)とは元福三右衛門からこの當時の三代目三右衛門をいふ。初代三右衛門が江戸に下つて小夜風と云ふ狂言に六法の内「花に嵐といふ臺詞を演じて藝名を博した。これより六方は彼の家の藝となり、二世三右衛門も六方の藝風を繼ぎ、三世三右衛門も亦江戸傳來の丹前六方を演じるので、江戸をきかせた名も「江戸堀を思出す」と云うたのでなつた。云ふから、今宮心中の上流で座元と永七年は十四歳である。序に云、六方は亂暴といふ語から出た語である。)

あらし さつきに言うてお越した娘川の嵐の芝居(便宜して下んしたか、生玉)嵐三十郎、鯉座橋とおしやる、心ばの、何の料理につかうても仕出しが甘い

「名優で、生玉情死のあつた正徳五年に於ける三十年の藝評について、は、役者反魂香(正徳五年刊)大阪の巻立役之部に、「上々高嵐三十郎、座本先以打つて座本おてから、少いやみな藝を仕出し、折々めづらしき口おひいはるは、俳諧を心がけ給ふ故、一作あつてせりふをかし、誠にいにしへ都万木夫座

へ上られ、顔みせに六法をふられし事を思へば、おたゞしき藝のあがり、今この堀にてやつたの總大將、おそらくはつゞく人はあるまい云々、今宮心中のこの文は、嵐三十郎の藝は甘味あつていよみな藝を仕出すので、藝をきかせた名前の鯉座橋といひ、何の料理に用ひても仕出しが甘いといふのである。

あらしやうりやう つよきおきめに栗田口、うりあげの水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈(大經師) 盆にば我も新精靈、親子の釜みぞはぎの、露の手向と引か(へて(水明日)「新精靈」新傳。精靈は聖靈とも書き、死者の亡霊をいふ。

あたらへ 和袴の御衣廣さ一尺五寸、粗袴の御衣廣さ一尺六寸(振袖始)

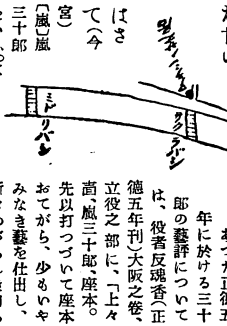
「粗袴」荒たとも書き、織目の粗なる布で、多くは袴の木の樹皮の纖維で織つたもの、あたへは「はにきたへ」の對語。「天照大神に奉る云々」を見よ。

あたらたま 新玉や年端も往かぬ子持(松風)

新玉また瑤玉など書き、年の枕詞である。本居宣長は「あたらたまはあたまたま(新新聞)のつゞまつた語で、年月の移り行く義で、それより「つき」よ「昔」などにかけていふ枕詞だといつてある。異説もあれどくだしから略す。

*あたら 三十五日の新精靈、あら血の上で死したる人(卯月調色) 如何なる人の何故に、刃の上の往生か、産のあら血か(薩摩歌)

「新血鮮血」



だと手習の、一字一字の読みみ聲(羅迦) おのればこのあははしやならだ手本たつた一行、文字なら七字(釋迦)

梵字、**あはは**(或は**あは**)**あは**の七字をいうたので、この字連続して別に意義があるので、なほ。

あらかはのよろひ 幕の内より比企の能員洗革の鍔、同じ毛の兜を高紐に掛け(袷合駈)

〔洗濯〕洗革を練した鍔。洗革は貞丈雜記に、薄紅に染めたるのとあれども、春日永年が温古燻竈に、阿良加波と讀むべきで、洗とは水に浸し濡してつくるからで、白滑革のはここであると見えてゐる。但純白の革ではなくて、ちまか黄ばみある革だとらふ。

***あらひくつわ** 馬に鞍置く隊もなく、洗辮にはだけせ馬(兼好)

〔洗辮〕鞵を附けただけの簡単な辮。岡本記に「洗辮にて馬乗る事あるべし、此時は兩方の手綱の端を手綱程に結び合せて乗るべし、これ洗辮にて馬の乗りやならし」須朝權出(古浄瑠璃)に「この馬天の與へぞと、端綱指引きり洗辮をかむとはませ、御賢候へ本多殿とひらりと乗れば。」

***あらひとがみ** さて兄弟ばあらし人の神領に三百町、老母が後家領三百町(貞八景)

〔現人神〕人の形を現はして居られる天皇のことをいひ、または人でありながら神に祭られてゐる者で、威靈あるによつていふ。

あらかみさき 三韓退治の神功皇后、皷船に立ちしあらかみさきを今見る如き勢なり(國性爺)

〔荒先鏝〕荒魂。荒神。日本書紀卷之九、

あらかはのよろひ——ありたけ

長足姫尊(神功皇后)の條に、既而則(携)荒魂爲(荒先鏝)。源平盛衰記四十三、神功攻新羅の條に、「皇后、翼賊を攻むべき旨、天照大神に申され、皇心を憐れと勿れとて、二人の荒みさきを差し副給へり。」

***あらせん**にん 我は大通智勝佛、劫成世界の契を違へず、阿羅遜仙人と現じ來れり(釋迦)

〔阿羅遜仙人〕梵語 Alara Kalaka。釋尊出家後早く師事された老哲學者で、印度王舍城の北彌提山に住んでゐた。毘林字は、この仙人を大通智勝佛の權化してゐる。

あらやうり 十二より賣られ來て、女郎さん逢の手入れにてあらゝ遺手に宮仕(戀物編)

阿羅遜仙人(前條を見よ)の阿羅遜に、荒なしい遺字をいひかけたのである。この前文に出る「釋迦頭」といふたその處でかく洒落た。

〔遺手〕に就いてはその條を見よ。

***あらながま** ちやせん髪、いひ甲斐もなき身なれども、武道をみながく鍛釜、たぎる心は運次第(雜種二)

〔鍛釜〕茶の湯に用ひる釜の一種で、釜の形を表面に出したものである。雅選狂集冬に二人の來りけれど、折ふし酒なれば茶をたて、人の鬚を茶釜酒。

***あられぬさま** 心根も聞かぬ爲、お齒黒落しつ(あられぬ様で夕鬱)

〔有られぬ様〕あり得べもない奇異な姿。あられればしり、あらればす(百合巻)も、春めし渡り寒からばす(百合巻)

〔阿良體走〕たふかのせちあを見よ。
***あられもない** あられもない裸身に、海鯨がぬらつき、鯨がこそぐ

る(女護身) 〔有られもない〕あり得られきやにもない變な様なをいふ。
***ありあけ** 有明の火も消えた。起きてとばせと起されて(曾根崎) 枕の刀おつ取つて、ありあけしめし出でければ(松風)

〔有明〕有明燈の略。夜明まで點して置く燈火。「有りあけり」を見よ。

***ありあや** 何か歎きは有明の、月さが明ければいふ。

〔有明〕陰曆十六日以後は、睡月天にあつて夜が明ければいふ。
〔持統天皇〕
〔有明〕陰曆十六日以後は、睡月天にあつて夜が明ければいふ。

***ありやと聲々の** 鞠は最中、ありいありやと聲々の、八人語と覺ゆるに(遊庭秘録下、乞事の條に、「我輩待らんと思ふ時、聲を出して鞠を乞なり、此上に様々の乞聲あり、或はやく、或はありく、又はと乞ふ、式云、ありくわの聲、やくわの聲は猶徳人の乞聲なり」とあれば「ありいありや」と聲を乞ふ聲であらうくれ)をも見よ。

***ありきやう** 徳若に御萬歳と、御代も榮えませ、ありきやうあるあら玉や、年立返るあしたより(大經師)

徳若に御萬歳、當御殿榮えませ、ありけうあり新玉の、年立返るあしたより(天鼓)

〔ありきやう〕愛敬を萬歳頌では「ありきやう」ありけうと說つて言うたのである。萬歳頌は何れも文句多し異なる。この文はその萬歳頌によつたのである。生活心中、下之卷に「萬歳がありきやうある間の山」とある「ありきやう」は「萬歳」の條に就いて見よ。

***ありさま** あり様はこりや何事ぢや、いや氣遣ひな事ではない(舟渡與作) やれくありさままだらにあつたばこしゆもない(舟渡與作)

〔有明〕有明燈の略。夜明まで點して置く燈火。「有りあけり」を見よ。
〔有明〕陰曆十六日以後は、睡月天にあつて夜が明ければいふ。
〔持統天皇〕
〔有明〕陰曆十六日以後は、睡月天にあつて夜が明ければいふ。
〔遊庭秘録下、乞事の條に、「我輩待らんと思ふ時、聲を出して鞠を乞なり、此上に様々の乞聲あり、或はやく、或はありく、又はと乞ふ、式云、ありくわの聲、やくわの聲は猶徳人の乞聲なり」とあれば「ありいありや」と聲を乞ふ聲であらうくれ)をも見よ。
〔大經師〕
徳若に御萬歳、當御殿榮えませ、ありけうあり新玉の、年立返るあしたより(天鼓)

***ありたけ** 興作といふ博打打のぬす人めに、ありたけこたけしあげて(舟渡與作) ありたけこたけ引出しても、繼切一尺あらばこそ実綱魚酒も詰もありたけはだけ買つてやる(女橋)

〔有丈〕ありきりある限り、ありたけこたけ

一九

「ありたけはだけけ」の「たけ」は「だけけ」は「粉拂」の義で、「ありたけ」と同韻脚によつて續けられた語で、粉を拂いて残らずの意であらう。

ありのみ 命もなしやありのみの、

谷川ふりに身を投げう(青庚申)「有童」無し。梨の訓「なし」は無しに聞えるので、これを思ひて梨をありのみといふ。山家集にも、「花のをりかしかはにつむしなな梨、一つなれどもありのみと見ゆ」とある。「ありのみ」は梨であるから、「梨」を無しに通はして、「ありのみ」を無しに意にいらたのである。

ありべかかり それ煙草盆お盆と、

ありべかかりに立駈ぐ(曾根崎) 女子ども屏風ひげ、ちとお休みとありべかかり、花車は二階を下りにけり(三國志)

普通なみの所作。形の通りすること。あり能の通りといふ意である。手島塚庵の著に「ありべかかり」といふ本がある、人としてあつて然るべき修養法を記したので、かかひふ書名にし九のである。

諸分店風(この書も浪花鉦と稱し、延寶八年頃に作られた書である)松之部に「とかかひみては何事も苦しめなれど、かかからの短じやれはいや、たゞあたまからあつべきかゝりにして、いつともなしに寢實もわける口も言ふは、うれしうあり憎うあり、慰みにも張合にもなりませんれどもあつて、ありべかかり」は「あるべきかかり」ともいふはれてゐる。今様二十四孝(寶永六年刊)巻之一、世の人の鶴山の條に「人の親を養ふことありべかかりにて、さのみ孝行とは、いひ難し」現今も福山市あたりにて「ありのまゝをいふ」といふことを「ありべ通りをいふ」といふ。

ふ。ありべ通りのありべも、ありべかかりのありべも同じ語である。
ありまふて 「ゆな」の條を見よ。
あるき 双方の庄屋月行司、村のあたるきは棒突並べ(女夫池)
あるじやう 「でう」を見よ。
あれます 忝しや、天地と共にあれます御神體(國性節後日)

あれん あれんあれんと聲立てて、

紙帳のうちへ逃げて入る(兼好) あれ。「あれん」のんは他音の下に加はつた撥音で、「ゆま」所以が「ゆまん」となる類である。
あわもり ちんだ泡盛、薬と汲むや玉の井が(酒呑童子)

あむずり 藍ずりの狩衣烏帽子取出して(娘)

「藍摺」藍または青草で布或は紙に模様を摺つけたもの。
あを 加番見れどもあをもなく、上りも知らぬひらよみに(大藏冠) なたは加番にあなのぼん様(女楠)

「青」うすすんかたる四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うすすんかたるは四枚づつ、十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づつあつて、其中第十の青の札を「青の札をいふ、この札を青廻と云ふによつて坊様と云うたのである。「うすすん」の條を併せ見よ。

「青編笠」青くて新しい編笠、遊客が編笠を被つて遊安町に行くは當時の風俗である。「はし」の條の繪を見よ。異林子のこの文は、新町遊廊の夜見世に笑く炭火(その條を見よ)が遊客の青編笠に映じて紅葉色になる意で、青に對して紅葉と受けたのである。
あをうまのせちあ 程なく御即位ましまして、白馬の節會に觀覽あり(大藏儀)

併せ見よ。
あをあみがさ 青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕ま(冥途飛脚)

あをささきらひ 繩を解かんと取付く腕元、すんど立つてはたと踏み、慮外なり青侍、女護身)

「青」うすすんかたる四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うすすんかたるは四枚づつ、十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づつあつて、其中第十の青の札を「青の札をいふ、この札を青廻と云ふによつて坊様と云うたのである。「うすすん」の條を併せ見よ。

あをささきらひ 繩を解かんと取付く腕元、すんど立つてはたと踏み、慮外なり青侍、女護身)

「青」うすすんかたる四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うすすんかたるは四枚づつ、十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づつあつて、其中第十の青の札を「青の札をいふ、この札を青廻と云ふによつて坊様と云うたのである。「うすすん」の條を併せ見よ。

「青」うすすんかたる四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うすすんかたるは四枚づつ、十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づつあつて、其中第十の青の札を「青の札をいふ、この札を青廻と云ふによつて坊様と云うたのである。「うすすん」の條を併せ見よ。

「青」うすすんかたる四十八枚の内、青く彩色した札をいふ。うすすんかたるは四枚づつ、十二に別ち、其第二から第十二までに青と稱する札各一枚づつあつて、其中第十の青の札を「青の札をいふ、この札を青廻と云ふによつて坊様と云うたのである。「うすすん」の條を併せ見よ。

「青侍」未熟な侍。生れ侍。南嶺遺稿に「青侍」官位せざる未熟の侍。
*青道心 炮碌頭巾の青道心、墨の衣の玉襟(天綱鳥)

あををつづら まさきのかづら青葛、くる人ありとも知り給はず(蟬丸)

「青葛」漢名・木防己と稱し、山野に自生する蔓生植物で、葉は互生して心臓形をなし、淡綠色の小形花を開く。蟬丸のこ、の文、青葛纏るを來るにかけたのである。平家物語灌頂卷、小原御幸の條に「まさきのかづら青つづら、來る人稀なる所なり」。

あをにぎて 波の白木綿青幣、かゝる遠國波濤にも(女護身)

「青幣」麻に麻子を長く附けたのを幣といひ、青幣は春にかたどり、白幣は秋にかたどる。二季の祭に用ゐる。「にぎて」といふは、右の手で祭る故に「みぎて」といふを釋した語である。古語拾遺に「麻以爲青和幣」。

「青女房」未熟な女房。「青」は青侍などいふ青である。女房とは、もと女の後宮に部屋を持つてゐるを稱するより起つた語である。もと尚侍より以下、藥中の女中に稱したが、貴

「青女房」未熟な女房。「青」は青侍などいふ青である。女房とは、もと女の後宮に部屋を持つてゐるを稱するより起つた語である。もと尚侍より以下、藥中の女中に稱したが、貴



【らづつあ】

族の家に奉仕する女にも稱することになり、今は廣く美女の通稱となつたのである。

***あそびのこま (重女)**

〔青柳〕白馬のこまなれども、普通には黒みを帯びた駒をいふ。萬葉集に「青駒のあかきまはやみ」、青旗の小旗のうへを」とある。青も白の義である。白をあ(青)といふ例は宋詩にも白駒を頸飾とも作られてゐる。蓋し春の始なれば青といつたのであらう。

***あそびとくさ 我が國を人草のいろを守るぞや(西王母)**

〔晋〕人草は養生に同じ。草のやりに多ければいふ。萬民。

あそやぎのちつづぎぬ 誠や花とみ

つしほの、つまくれなみの楯扇を、船のせがいに挟み立て、水の縁も青柳の五衣のそば取つて(加増曾我)

〔青柳〕五衣、青柳とは表白く裏青きをいふ。夏季はこれを卵の花といふ。五衣は女官などの衣の五枚重ねたやうにしたもので、その重ね方に櫻がさね、梅がさねなどの名目がある。また五重ねでなくとも、多く重ねたのを五衣とさふともある。「ちつづぎぬ」を見よ。菓林子のこの文は、平家物語卷十一、那須の與一の事の條に「年の齡十八九許なる女房、柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挟みたて」とあるに據つたのである。

あそる

「あふる」を見よ。

あん じつとしめられ現をわかし、

こりやあんなる因果骨、めつきめつき致す御免あれ(女護島)

「なん(何)の子音の脱落した詠語」「あんなる」は「何たる」といふ事。「あんだ」を併せ見よ。

***あんぎや 西國行脚とこころざし**

此處まで参りしが(吉野忠信) 行脚の宋音。道心修業の爲名師善友を訪うて諸國を遊歴すること。轉じて、徒歩で諸國を遊歴すること。祖庭天下八に「行脚者謂て遊離曲、脚行天下、脱情捨累、尋訪師友、求法證悟也、所以學無常師、徧歷爲行」

***あんごう これ祈經、あんごうらし**

出抜かれ、月夜にかまぼこ不覺の至り(加増曾我) 暗風が罷つて延びた詠。暗風馬鹿馬鹿者。あんごう

***あんじやう 世尊安祥として、止み**

れ止みぬ須達長者(釋迦) 端嚴美麗の御僧あんじやうと出現あり(貫古教団)

〔安祥〕安祥とも書く。從容自得の貌。悠々として迫らぬ貌。法華科註卷一之下に、「爾時世尊從三昧安祥而起、告舍利弗云々」と見え、註に「安祥、知音云、從容自得不急遽貌」

あんじゆ (并簡)

〔安齋〕さんしやうだふを見よ。

あんぜん 若き賤の男産兒を抱き、

あんぜんとして佇めり(松風) 〔黯然〕傷む貌。江淹の別賦に「黯然銷魂者、惟別而已矣」

あんだ 韃靼人怖うない、今日の大

將此錦舎、日本のあんだ辨慶すつすつと、小首振つてぞ勇みける(國性爺後日) おらが若い時や腕に生傷絶えなんだ、今でも二つや五つばあんだ焚噲だ張良だ(關八州)

「なん(何)だ」を脱つた小見語である。甲子祭

(天和四年刊「淨瑠璃加増條正本」第一に「この辨慶がからいふからは父上の御敵平家一統討滅し、名を後代に揚げんこと恰も願をめぐすべからず、あんだ辨慶これまどと剃刀打振り誦出でける」あんだ辨慶とは辨慶何者ぞの義、轉じて何でもないと思ふ意にいふ。關八州懸馬のこに擧げた文は、小歌吾聞久爲志に懸馬の正保順流行した奴謡歌「おらが若い時は蝶蝶遊でもつんのんだ、今も一つ二つやあんだ辨慶」の改作である。

あんだら あんだらめには拳一つ當

てすほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇(女教) 今を最期の石川眼をくわつと見開き、やいあんだらの大馬鹿ども、この子を下に敷いたるとて命生ける五右衛門か(吉岡逸)

「彼やどらの轉訛であらう。「どらの條をも見よ。痴。愚鈍。越谷秀真編・物類稱呼・五に「おろかにあさましきを京大阪にてアンドンアンドンと云、伊勢にてアングウまたセーフと云、増補俳諧集覽に「あんだら。あんげら、あんごう、痴をいふ」永代簡用集に「暗情痴。無能。和訓派に「あんだら、臨俗の語なり、あだを強くいふ語なるべし、あだ口をきく事をあんだら口をたぐくべし(へり)」。あんだら。安堵の所領三百貫、子孫に傳ふる弓矢の道(川中島) 吉田の家皆松若に勅許なると、安堵の論旨渡さるれば(隅田川)

〔安堵〕武家時代に、土地の所有權を承認するを云つた語。時勢が變つても、なほ普通に父祖の所領を知行し、或は久しく中絶してゐた所領を返し與へることを本領安堵といふ。本領安堵のときは、其證として教書または下文安書などを下し與へる、その文書を安堵または安堵下文、安堵御判ともいふ。

***安東入道 安東入道が理窟をこれ**

るもかくやあらん(大律師) 安東左衛門入道聖秀を云ふ。北條高時仕へた人ど、北條氏の滅びる時に、鎌倉の焦土へ自害せうとした際、義貞の妻書を添つて降服を勧めた。聖秀曰く「海嶽の林に入る者は染めざに衣自ら香しく聞く。武士の妻ともある者はけなげな心を持つて、其家をも織き手孫の名をもたはずべきであるとして、王陵の故事を引き、事の急な場合に臨んで、降人となれば恥を知る武士のせざる所である」と書放ち、使者の面前で、鎌を刀と共に掲つて自刃した。鮮しいことは太本記に共に見ゆ。安東入道自事付源王陵事の條を見よ。

***あんない 上手と聞きし神子の門**

あゝ申しちと口寄せを頼みませうとぞあんない(卯月紅葉) 案内を動詞連用形のやうに用いたのである。

***あんばい 只今山の草刈に借つた鎌**

の鹽梅見よと(百合菖) 蒟蒻豆腐の鹽梅よし鹽梅よしとぞ賣り歩く(孕常盤)

〔按〕排味のかけん。かあひ。やうす。「鹽梅」とも書けども、「鹽」は「えん」(えん)で「あん」の音ではないが、意義が合ふので借用されるのであらう。「えんばい」を見よ。節用集「易林本・醜與屋本」に「按排。俳諧集覽に「あんなばい。按排の音にて、五味を調和するをいふ。後世鹽梅の字を用ふるは附會なり、またあんなばいは按排の音より出で、味をいひ、轉じて物のをりあひ様子のことにへり、ヨイアン・バイン・アインガウリなどの類なり。

***あんばいよし 何でも今夜はあん**

ばいよしでもぶちくらつて、小半切のけんどん酒あたまわり十文

出し(吉岡梁)

「接排好」鹽梅好しとも書く。田樂豆腐をいふ。元祿正徳頃上方では田樂を賣るに「蕎麥豆腐の鹽梅よし」と聲立て、賣り歩いたので(脚跡を見よ)「自」この物の名になつたのである。あんばくよしでも物くらふといふ。田樂豆腐でも食ふといふ意。「ぢぢは」ぢぢ(打)の訛で接頭語めきた語である。丹波興作に「ぢぢの賣をぢぢあげとある」ぢぢと同じ語である。



(傾城紫短氣第三編所載)

あんばくもの 打碎く程なればおのれば頼まぬ、あんばく者め、又捻餅くひたいか(會稽山)

「わらは(童)が普便で「わつぱは」こつまり「わんぱく」と字音を増加して訛り「あんぱく」と字音の脱落した訛語であつて、「あんぱく者」は即ち「わんぱく者」「ちたつち者」とらふことでも、小兒にさふ。

あんぱら 鬼とも組むべき男ども、あんぱら取つて敷かずやら(博多) 奥を掃いて拭つて、新しいあんぱる敷け(國性爺後日)

南洋地方に産する貝多羅(アンペラ)属の多年生草本植物の葉を堅に細く裂いて編んだ席。あんぱらはあんべるともつた。 あんもちか 五十餘級の衆徒の首、光明に照されて果累と連りしは、梢に實る佛前の、あんもちかとも

謂つて、く(女護身)

〔権藤維徳阿羅漢遊とも書、略して巻羅とす、印度卷羅國精舎に多く築造してある園で、我國では大和國琴波山神社境内に一株生茂し、その實は林檎に似てゐる。西域紀八に「阿羅漢遊」印度卷羅之名也。〕

*あんやう 安養極樂世界(薩摩歌) 安養無垢世界(彌九) 安養世界(反魂香) 安養寶國(賀古教信)

〔安養アンニヨウと發音し、西方極樂淨土の異稱。〕

*あんらくこく 安樂國(賀古教信) 〔安樂國阿彌陀佛が四十八箇條の大願を起し、長時修行された結果、建設された西方極樂淨土の稱。無量壽經に「無」有三途苦難之名、但有自然快樂之音、是故其國名曰安樂。〕

*あんらくせかい げにや安樂世界より今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音(會根樹)

〔安樂世界阿彌陀に述べた「安樂國と同じくげにや安樂世界より云々」を見よ。〕

いらいち 〔飲食み喰ひとして云々を見よ。〕

いらかん いかん大度の御臺所(明八州) 〔幽閑幽閑とも書く。女子が貞節の徳を具へるをいふ。窈窕、詩經、周南、幽閑、窈窕に窈窕淑女、君子好逑とあつて、毛傳に「窈窕、幽閑」とある。〕

*いらくん 元の根さしば豊後の國濱の市の遊君なりしが(百合巻)

〔遊君「略して君ともいふ。遊女の稱。傾城。いらく」右近と申す侍女三の君に似たる由、すなはち高房猶子となし、御徒然をいさめん爲(酒呑童子) 〔猶子「兄弟親族または他人の子を養つて己の子とすること。養子。禮記・檀弓篇に「兄弟之子猶子也。〕

*いらしよく 和歌の道・文の道、有職等にも暗からず(大徳虎)

〔有職「物知りの職。故實。「いらしよく」は「いそよく」ともいふ、もと有職と書して有習語の義である、それが識と職と字形の似であるので誤り、處方も轉じたのである、易林本節用集に「有識」。〕

*いろうひつ 墨つき筆勢、御家中の右筆兼にも少い程の器用人(川中島)

誰知らぬ者もない傾城の右筆(編山遊) 〔右筆「文筆に長じた者。武家の書き役。また元祿頃には、堀山遊のこの文にある荻野屋の八重桐のやうに、遊女町にも女師筆が居り、また大色一代女(井原西鶴撰)と上つ方よろづに右筆の條に「京に女師筆とこつ方よろづにつけて年中の諸禮覚え、……門柱に女筆指扇の張紙して、一間なる小座敷見上げに住みなし、山出した女ひとりつかひて、人の恩女をあづかること大方ならずと、毎日意はず清書をあらため、女に入る程の所作を教へし」とある、かうやら女師筆も居たのである。〕

*いろうひつ 干戈成揚相挟み、左輔右弼列を引く(國性爺) 左輔右弼の旗を立て(唐船節)

〔右弼「さほいろうひつ」を見よ。〕

*いろうめん 宥免するも事による、曾我は君の御仇、不吟味にはなり難

し(百日曾我)

〔看免罪科をなだめゆるすこと。北魏郭祚傳に「不問輕重、皆蒙宥免」。〕

*いかに 極めて御下向羨ましい、今にいかい参りか(卯月潤色) 和女はいかひ物識ちや(羅迦) 明日お目に懸らう、いかう睡たい寝まする(生玉) (はていかうりんすりんといふ女子ぢや(女腹切)) 〔羨ましく思ふこと。甚し。いかに「は」か「い」の副詞形。〕

*いかに いがき越えしも戀の罪(丹波興作) 〔思惟いみがきに齋藤の略。神のみます所なれば、けがれなどと思ふ隔てる垣の義。神社の周圍に設けた垣。〕

*いかに 白鞍・塗鞍・鏡鞍・金覆輪・銀覆輪・梨地・いかげち・らでん・かなかひ美を盡し(源義經) 〔茨懸地漆塗の上に、金粉または銀粉をひまなく沃きかけたもの。〕

*いかに 客は「きはいかづげに」駕籠を飛ばす揚屋客(安登) お徒足輕いかつ聲、こりやこりやお犬のお通り、乗物据まけて下馬致せ(千足犬) 侍畜生大たはて下と、いかつ吐いてぞ申しける(出世書清) 〔懸いかつしること。さかめしこと。成あつておごそか。〕

*いかに 馬よ聴いたか聴いたかと言へども、いかな馬の耳、風に嘶くばかりなり(鐘權三) さもない内はいかなこと、ならぬならぬと睨